

平成 25 年度 修士論文

青年期における内的作業モデルの変化について

弘前大学大学院 教育学研究科

学校教育専攻 学校教育専修 教育心理学分野

12GP103 長内紗希

目次

第一章	問題と目的	3
第二章	内的作業モデルの変化と防衛及びライフイベントとの関連に関する予備的研究	
第1節	目的	1 4
第2節	方法	1 5
第3節	結果	1 7
第4節	考察	2 5
第5節	まとめ	2 7
第三章	内的作業モデルの変化と防衛及びライフイベントとの関連に関する研究(質問紙調査)	
第1節	目的	2 9
第2節	方法	3 0
第3節	結果	3 1
第4節	考察	4 6
第5節	まとめ	5 6
第四章	内的作業モデルの変化と防衛及びライフイベントとの関連に関する研究(面接調査)	
第1節	目的	5 9
第2節	方法	6 1
第3節	結果	
第4節	考察	6 3
第5節	まとめ	7 0
第五章	総合考察	
第1節	IWM の変化と防衛及びライフイベントとの関連について	7 3
第2節	今後の展望	7 5
文献	7 6
資料		
(1)	質問紙 (本調査二回目調査時に使用したもの)	
(2)	面接承諾書	

この論文は、研究協力者である学生の事例をもとに行った研究であり、面接によって話された内容については守秘義務が生じますので、広く公開される「弘前大学学術情報レポジトリ」への搭載にあたって、研究協力者により語られた内容である第四章の結果については削除してあります。

第一章 問題と目的

(1) 愛着とは

子どもと母親には、特別な結びつきがあると古くから考えられてきた。なぜ特別な結びつきがあるかについては、諸説あるが、古くは二次的動因説が最も支持されていた (Bowlby 1969 黒田・大羽・岡田訳 1976)。赤ん坊は誰かに世話をしてもらうことで、初めて生存することができ、赤ん坊は世話をしてくれる人物が必要である。そこで、生理的欲求を満たしてくれる養育者と赤ん坊の間には結びつきが生まれるというものである。

しかし、Harlow の行った実験において二次的動因説は支持されなかった。Harlow の実験とは、誕生直後に母ザルから分離された子ザルたちに、針金で作られたモデル・マーザー (代理母) か、それに柔らかい布を巻きつけたモデル・マーザーのいずれかを与え、飼育するというものである。この実験から、どちらのモデル・マーザーからミルクを得たのかということは関係なしに、全ての子ザルは大部分の時間を布製のモデル・マーザーと過ごすという結果が得られた。そのため、愛情反応の発達において重要なのは、授乳よりも快適な接触であり、生理的欲求の充足とは関係なく絆を持つことが示された (Bowlby 1969 黒田ら訳 1976)。

そこで、母親に対する子どもの結びつきは、母親に接近しようとする行動システムの 1 つの所産であると考えたのが Bowlby である。Bowlby (1969 黒田ら訳 1976) は、この母子間の特別な絆を愛着と名付け、愛着理論を発展させていった。

(2) Bowlby の愛着理論

人間の愛着性はいろいろな行動によって示され、例えば、泣き叫ぶ、喃語をしゃべる、微笑む、しがみつく、接近のために動く、後を追う、探し求めるなどである。Bowlby (1969 黒田ら訳 1976)は、このような愛着行動は、略奪者からの防御が最も大切な機能であり、子どもは愛着行動を行うことにより自分自身を守ることを目的としていると考えた。また、発達初期においては、子どもが期待した結果を得るために、それが母親への近接という形で表れるが、後に愛着行動が複雑さを増すことが示された。そのため、Bowlby (1969 黒田ら訳 1976)は以下のような4段階の愛着の発達段階を提言した。すなわち、人に対して愛着行動を行うが人物弁別を伴わない第一段階、ある特定の弁別された人物に愛着行動を行う第二段階、人物弁別を行い、接近の維持などより広い愛着行動を行う第三段階、状況に合わせ目標修正的に愛着行動を行う第四段階である。第四段階に入ると、認知能力の発達に伴い、母親が離れているときでも、どんなつもりで行動しているのかがわかるようになる。離れていても、母親と自分との関係は存在し続けるということがわかるようになり、必ずしも、空間的に愛着対象に接していなくても安心していられるようになり、身体的接近も必要としなくなっていくというわけである。

また、Bowlby (1973 黒田・岡田・吉田訳 1977) は、子どもは愛着対象との相互作用を通して、内的作業モデル(**Internal Working Model**, 以下 **IWM**)を形成することも提言した。**IWM** とは、自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのか、他者は自分の要求に対してどの程度応じてくれる存在なのか、という自己と他者に関する表象であり、人はこの **IWM** を以降の対人関係において用いる枠組みにしていくことを示唆している。

Bowlby (1973 黒田ら訳 1977) は **IWM** 形成のもっとも敏感な時期を6ヶ月から5歳前後とし、その後10年間は次第に感受性を減少させながらも変化するが、その後は一生を通して比較的变化することなく持続する傾向があるとしている。つまり、もしも子どもが初期の経験にもとづいて、不安定なタイプの **IWM** を形成したならば、そのモデルを親に対してだけでなく、他者に対しても適用していくこととなり、自分は、親だけでなく他の他者からもまた望まれることなく、応答されることもないのだというように感じるようになるのである。

さらに、人は激しい苦悩をもたらす情報を排除しようとする“防衛的排除”(defensive exclusion) (Bowlby 1980 黒田・吉田・横浜訳 1981)を行い、何を認知し、何を無視するか、新しい事態をどのように解釈するか、どのような種類の人を求めたり避けたりするかについて調節を行い、自分の環境選択に影響を与え、現在の発達経路を固持する (Bowlby 1969 黒田ら訳 1976)ので、一度構築された作業モデルに合致するように情報が選択され、いったん形成された **IWM** は意識の上で問題にされにくく (Bowlby, 1973 黒田ら訳 1977)、それがたとえ不合理なものだとしても、永続的に維持されることが示唆されている。このように、良くも悪くも自身の **IWM** に合致した対人関係や社会的環境を身の周りに構築しやすくなり、逆に自らの **IWM** に変更を加えうるような、それまでとは異質な対人関係を自ら

遠ざけてしまうことになるため、アタッチメントの質には、変化が生じにくくなるというわけである。

このように **Bowlby** は、幼少期の経験が人生を通して継続的に影響を与えるという立場をとり、早期の子どもとの関わりの重要性を提言したのである。

(3) 愛着理論に対する実証研究の広がり

Bowlby の愛着理論を中心に、愛着に関する研究は盛んになっていくこととなる。

Ainsworth は愛着の個人差を実験により把握するストレンジ・シチュエーション法(strange situation procedure, 以下 SSP)を開発し (久保田, 1995)、SSP を用いた実験によって、愛着のパターンを「A タイプ (回避 avoidant 型)」「B タイプ (安定 secure 型)」「C タイプ (アンビバレント ambivalent 型)」という 3 つのタイプに分類した。また、各 3 分類の子どもの母親には、乳児に対する特有のコミュニケーションパターンがある (Ainsworth, Bell, & Stayton, 1974) ことから、子どもの様々な信号に対する親の応答の敏感さや適切さと、子どもの愛着の質の関連が注目されるようになっていき、愛着という概念に対する注目も増えていった。

最初は乳幼児期だけに焦点を当てていた愛着研究だったが、研究が進むにつれて、乳幼児期よりも後の愛着にも焦点を当てていくようになった。しかし、赤ん坊が成長していくと、認知能力の発達に伴い、必ずしも、空間的に愛着対象に接していなくても安心していられるようになり、乳児期の時のような身体的接近も必要としなくなっていく (Bowlby 1969 黒田ら訳 1976)。認知が発達している成人は、乳幼児に比べると、愛着行動をとることが少なく、愛着を愛着行動の観察によって評価することが困難である。そこで、青年期・成人期の愛着に関する研究では愛着を表象としてとらえ、研究していくようになった。

(4) 成人の愛着研究に関する測定方法について

青年期・成人期の愛着研究は、愛着を表象として捉え、その表象である IWM を測定することで発展してきた。IWM の測定にあたっては大きく分けて 2 つの方法が用いられてきた。1 つはアダルト・アタッチメント・インタビュー(Adult Attachment Interview, 以下 AAI) (Main, Kaplan & Cassidy 1985) であり、もう 1 つは自己報告型の尺度である。AAI は、過去の自分と両親との関係について質問することで、愛着に関する現在の心的状態を捉えようとする半構造化面接であり、語る内容ではなく、語り方について分析を行い、SSP における型に対応するようなタイプに分類される (e.g., 安藤・遠藤, 2005; 中尾, 2012)。AAI は過去の養育者との相互作用の記憶への表象的接近の仕方を問題にするものであり、現在の対人関係については問題にしていない。そのため、現在の愛着対象についての見方や信念を評価するという視点から、自己報告型の尺度が開発された。AAI は施行にあたり、訓練を要するので、実施できる者が限られているが、自己報告型の尺度は特別な訓練を要さず、簡便であるので自己報告型尺度の開発によって、成人における愛着研究はさらに広がりを見せた。

現在よく用いられている自己報告型の尺度は、大きく分けて 2 つあり、1 つは 3 カテゴリー一尺度で、もう 1 つは 4 カテゴリー一尺度である。3 カテゴリーの尺度は Hazan & Shaver (1987) の尺度を基に数多く開発されてきた。Hazan & Shaver (1987) は Ainsworth らの幼児の 3 つの愛着分類に基づき、3 つの愛着スタイルから 1 つを選択させる尺度を作成した。しかし、3 つの中から 1 つを強制的に選択させるのでは、細かな個人的特性がよくわからない。そこで、Hazan & Shaver (1987) の尺度を基に、複数の項目からなる尺度が数多く開発されたのである。日本では、3 カテゴリーの尺度は託摩・戸田 (1988) が作成したものがよく使用されており、これは個人の IWM を安定型、アンビバレント型、回避型の 3 次元からとらえようとするものである。

一方、4 カテゴリー一尺度は、Bartholomew & Horowitz (1991) が作成した尺度を基に開発されてきた。Bartholomew & Horowitz (1991) の尺度は、Bowlby (1973 黒田ら訳 1977) の IWM は自己に関する表象と他者に関する表象であるという知見に基づき、自己観 (自己に対する表象) と他者観 (他者に対する表象) がそれぞれポジティブなのかネガティブなのかにより構成される、4 つの愛着スタイルから 1 つを強制的に選択させるというものである。この尺度を基に、複数の項目からなる尺度が開発された。日本では、4 カテゴリーの尺度は中尾・加藤(2004)が作成したものがよく使用されており、これは「自己観 (自己についての IWM、見捨てられ不安)」と「他者観 (他者についての IWM、親密性の回避)」の 2 次元がそれぞれポジティブなのか、ネガティブなのかにより IWM を量的に捉えようとするものである。また、その値から、①安定型 (自己観、他者観がともにポジティブ)、②拒絶型 (自己観がポジティブで、他者観がネガティブ)、③とらわれ型 (自己観がネガティブで、他者観がポジティブ)、④恐れ型 (自己観、他者観がともにネガティブ) の 4 つに類型化して使われることも多い。

様々な尺度があると、当然考えるのはその対応性だが、中尾・加藤（2003）によると、4 カテゴリー尺度と、3 カテゴリー尺度は関連しており、3 カテゴリー尺度による愛着スタイルは、4 カテゴリー尺度による愛着スタイルのモデルから解釈することが可能であるため、4 カテゴリー尺度を用いることが適切であると考えられる考え方がある。

(5) 成人の愛着に関する実証研究

自己報告型の尺度が用いられるようになってからは、その利便性から成人の愛着研究は飛躍的に進み、従来の研究において、IWM と他の変数との関連は数多く研究されている。例えば、青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連を扱った研究では、友人関係において、親密性の回避が高い（他者観がネガティブ）と、自己認知が「社交性」、「魅力性」、「人柄の良さ」、「自信」といった側面において低くなることや、見捨てられ不安が高い（自己観がネガティブ）と、他者との関係満足度が低くなることが示されている（金政, 2007）。また、大学生の愛着スタイルとソーシャルスキルおよび心理・社会的適応との関連を扱った研究では、安定群が他の群に比べてソーシャルスキルが高く、アンビバレント群は他の群に比べて精神的不健康度が高いことが示された（堀・小林, 2010）。このような結果から、安定的な IWM を持つことは個人に一般的に望ましいと思われる結果をもたらすことが想定される。

また、Bowlby (1973 黒田ら訳 1977) が示唆したように、成人の愛着研究が進むにつれて、青年期のアタッチメントは幼少期のアタッチメントと関連があり (Hazan & Shaver, 1987)、Hamilton (2000) の縦断研究では、77%の者がアタッチメントの連続性を持つことが示された。この連続性のために、例えば、回避的な IWM が優位な者は、相手が好意的な反応を示しても、相手の好意や関心を低く評価し、相手の反応に関わらず相互交渉を避ける (戸田, 1989) など IWM が認知に及ぼす影響についても注目が集まってきている。

これらの知見より、安定した IWM を持つことは、個人が適応するにあたり、非常に重要なことであるといえるであろう。また、第一愛着対象者との相互作用により安定した IWM を持つことは、他者との関係において個人に、一般的に言ってよい結果をもたらし続けるが、もしも安定していない IWM を持ってしまったならば、それは他者との関係において個人に、一般的に言って悪い影響をもたらし続けることが予測される。

さらに、母親が安定したアタッチメントスタイルを持つことで、子どもも安定したアタッチメントスタイルを持つ (数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000) というように、世代間においても影響を及ぼし続けるものであり、個人がどのような IWM を構築するかは重要であると思われる。

(6) 内的作業モデル(Internal Working Model)の変化について

これまでの知見より、もしも不安定な IWM (見捨てられ不安や親密性の回避が高い) を持ってしまったならば、他者との関係において、個人に一般的に言って悪い影響をもたらし続けることが予測されるが、それはあまりにも個人にとって不幸なことであると思われる。

Bowlby(1980 黒田ら訳 1981)は、IWM の永続性を仮定する一方で、個人が内在化している IWM にそぐわない状況が外的要因によって生じた時、その IWM を新しいモデルに置き換えて環境に適応することも示唆している。事実、少数派ではあるが、Hamilton (2000) の研究では幼少期から青年期の間にはアタッチメントが変化している者もいた。嶋田・田中 (2005) の大学生を対象とした横断研究でも、幼少期のアタッチメントの安定が低かった者でも、他者との間で何らかの変化がもたらされるような経験をし、その変化をポジティブなものとして認識することによって、IWM の安定が高くなる可能性が示唆された。アタッチメントに変化をもたらすことができるのならば、不安定な IWM を安定した IWM にすることができ、個人によい結果をもたらすこともできると考えられる。そこで、IWM の変化に関連する要因を研究することは意義があると思われる。

また、幼少期から青年期という長い期間においてのみならず、青年期の間のごく短期間にも IWM が変化することを実証している研究もある。多川 (2003) の恋愛関係に注目した面接調査による研究から、青年期において、恋愛関係で得られた恋人に対する信頼感や安心感によって、対人関係観が変化するという結果が示されている。同じく、青年期の恋愛関係に注目した岡島(2010)の縦断研究では、アタッチメントスタイルの不安定型 (回避型・アンビバレント型) 40 名のうち、一カ月間の中に 7 名が安定型に変化し、個人が恋人の応答を応答的であると認知するようになることと、その応答に一貫性があると認知するようになることと関連を持つことが示された。これはポジティブなライフイベントを経験することによって、アタッチメントが安定的になることを示していると考えられる (後述の仮説 4)。青年期において、IWM が変化することを実証した研究は恋愛関係における研究が多いが、青年期において重要な人物は恋人には限らないために、親しい友人等を含め調査を行うことも必要であると思われる。

では、どのようなことが要因となり、IWM の変化は起こるのであろうか。アタッチメントが連続的であることを防衛的排除によるものと考えたと、理論的には、防衛的排除を行いにくい者はアタッチメントが変化しやすいことが考えられる (後述の仮説 1)。しかし、IWM の変化と防衛との関連を検討した研究はない。防衛と IWM の関連を検討した蓮華 (2008) による横断研究では、青年期と成人期における結果に違いがみられたことから、防衛と IWM の変化については今後縦断研究により検討していく必要があるとも言及している。そこで、本研究では縦断研究により IWM の変化と防衛との関連を検討することとする。

IWM の変化に関するその他の要因としては、ネガティブなライフイベントが考えられる。

Hamilton (2000) の研究では、不安定なアタッチメントを保持し続けている者は、安定的なアタッチメントを保持し続けている者や不安定なアタッチメントから安定的なアタッチメントに変化した者に比べて、両親の離婚などのネガティブライフイベントを有意に多く経験していることが明らかにされた。また、Waters, Merrick, Treboux, Crowell & Albersheim(2000)の、幼少期と青年期にアタッチメントを測定した縦断研究では、ネガティブライフイベントを経験した者は、経験していない者に比べ、安定したアタッチメントが不安定なアタッチメントに変化する者が有意に多いことが明らかにされた。さらに、Weinfield, Sroufe & Egeoland (2000) の縦断研究では、幼少期から青年期にかけて不安定なアタッチメントを保持し続けている者は、不安定なアタッチメントから安定したアタッチメントに変化した者に比べて、虐待をうけている者が有意に多いことが明らかにされた。これらの研究から、ネガティブなライフイベントを経験している者は不安定なアタッチメントを保持したり、安定したアタッチメントを不安定なアタッチメントに変化させることが明らかとなっており、IWM の変化の要因を探る上でネガティブなライフイベントは重要な要因であり、また、アタッチメントを不安定なものにすると思われる（後述の仮説 3）。ライフイベントによりパーソナリティの変化が生じること（Roberts & Wood, 2006）は社会化効果と呼ばれ、日本でもその効果が確認されている（川本, 2013）。ネガティブなライフイベントがアタッチメントの変化に影響を及ぼしていることから、IWM も社会化効果の影響を受けていると考えられる。

さらに、多川（2003）や岡島(2010)の研究より、虐待のようなネガティブライフイベントだけでなく、ポジティブなライフイベントを含む、青年が日常的に体験するライフイベントによっても IWM が変化する可能性は考えられる（後述の仮説 2）。そこで、本研究では、IWM の変化に関わる要因として、防衛と青年が日常的に体験するライフイベントを取り上げ、IWM の変化との関連を検討することを目的とし、以下の仮説を中心に検証していく。

仮説 1：防衛が低い者ほど IWM が変化しやすい。

仮説 2：ライフイベントを多く経験している者ほど IWM が変化しやすい。

仮説 3：ネガティブライフイベントを多く経験した者ほど、IWM がネガティブな方向に変化する（見捨てられ不安や親密性の回避が高くなる）。

仮説 4：ポジティブライフイベントを多く経験した者ほど、IWM がポジティブな方向に変化する（見捨てられ不安や親密性の回避が低くなる）。

第二章 予備調査

第1節 目的

本研究では、IWMの変化に関わる要因として、防衛と青年が日常的に体験するライフイベントを取り上げ、IWMの変化との関連を検討し、前章で挙げた以下の仮説を検証することを目的とした。IWMの変化、防衛、及び日本においての尺度を用いて測定したライフイベントの間の関連は検討されていないことや、IWMが一ヶ月でどの程度変化するのかがわからないことから、予備調査を行い、関連がみられるかどうかを確かめ、調査一回目と調査二回目の間隔についても検討する。

仮説1：防衛が低い者ほどIWMが変化しやすい。

仮説2：ライフイベントを多く経験している者ほどIWMが変化しやすい。

仮説3：ネガティブライフイベントを多く経験した者ほど、IWMがネガティブな方向に変化する（見捨てられ不安や親密性の回避が高くなる）。

仮説4：ポジティブライフイベントを多く経験した者ほど、IWMがポジティブな方向に変化する（見捨てられ不安や親密性の回避が低くなる）。

第2節 方法

- (1) 調査対象 看護学生 37名 (第一回調査時 37名、第二回調査時 36名) を対象とした。二回の調査による縦断研究の対象としたのは 36名である。
- (2) 手続き 授業時間内に質問紙を配布・回収を行った。
- (3) 調査時期 一回目の調査を 2013年6月に、二回目の調査を 2013年7月に行った。一回目の調査から二回目の調査までの期間は一か月である。
- (4) 質問紙の構成

1) 調査一回目の質問紙

a. 属性

個人属性として、年齢と性別への回答を求めた。

b. 防衛スタイル尺度

Andrews, Singh & Bond(1993)の“Defense Style Questionnaire”を参考に、中西(1998)が作成した尺度を用いた。この尺度は3つの下位尺度、「未熟な防衛(投影、受動攻撃、行動化、隔離、価値下げ、自閉的空想、否認、置き換え、解離、分裂、合理化、身体化)」「神経症的な防衛(打消し、エセ愛他主義、理想化、反動形成)」「成熟した防衛(昇華、ユーモア、予測、抑制)」から構成されている。尺度の評定には9件法(“1.私に全然当てはまらない”～“9.私に全く当てはまる”)を用いた。

c. ライフイベント尺度

高比良(1998)の作成した大学生用のライフイベント尺度の対人領域を用いた。この尺度は自分に起こったネガティブ・ポジティブライフイベントを領域別に測定するものである。回答は、過去1年の間に「経験した」「経験しない」の2件法で求めた。得点が高いほど、ネガティブ・ポジティブイベントを多く経験しているとみなされる。

d. 一般他者愛着スタイル尺度

中尾・加藤(2004)の一般他者愛着スタイル尺度(Experiences in Close Relationships inventory the generalized other version)作成に用いられた36項目を用いた。この尺度は2つの下位尺度「見捨てられ不安」「親密性の回避」から構成されている。尺度の評定には7件法(“1. 全く当てはまらない”～“7.非常によく当てはまる”)を用いた。回答は、現在、一年前、それ以前(1年前よりも過去)で最も対人関係が変わった時期の前の3つの時期それぞれに求めた。

e. 対人関係についての質問項目

山岸(1997)参考に、嶋田・田中(2005)が作成した自由記述式の質問項目を参考にし、一年前とそれ以前では、どちらの方が、対人関係が変わったと思うか、その時期に他者の存在や影響はあったか、他者の存在や影響があった場合、その人は誰で、どんな存在か、その人との間でどんなことがあり、自分はどんなふうに変ったのか。それ以前の自分はどんなふうであったか、その変化は自分にとってよいものだったかどうかを尋ねた。

f. 幼少期のアタッチメント

青柳・酒井（1997）が作成したものを用いた。この尺度は3つの因子、「avoidant」「ambivalent」「secure」から構成されている。尺度の評定には4件法（“1.当てはまらない”～“4.当てはまる”）を用いた。

2) 調査二回目の質問紙

a. 防衛スタイル尺度

b. ライフイベント尺度

調査二回目では、前回の調査からの間、過去1か月に経験したかどうかを求めた。

c. 一般他者愛着スタイル尺度

d. 対人関係についての質問項目

調査二回目では、前回の調査からの間、過去1か月の対人関係について尋ねた。

第3節 結果

予備調査においては、前節の方法に記述した尺度についてデータ収集を行ったが、結果と考察については、本調査に通ずる一部のみを掲載することとする。

本研究においては、IWM の変化の研究が未だに少数であること、先行研究では得られなかった知見が新たに得られたことを加味して研究の可能性を広げるため、10%の有意水準までを有意であるとみなして論を進めることとする。

(1) 愛着スタイル尺度と防衛スタイル尺度の構成

1) 愛着スタイル尺度について

IWM は理論上、「見捨てられ不安」「親密性の回避」が独立していると考えられているため、2 因子構造が適切であると思われる。そこで、中尾・加藤 (2004) に従い、重み付けのない最小二乗法・Varimax 回転による因子分析を行った。その結果、想定通りの 2 因子構造となり、因子妥当性が確認された (表 1)。しかし、項目 34、項目 25 の因子負荷量が低く、中尾・加藤 (2004) とは多少異なる結果が得られた。だが、中尾・加藤 (2004) の尺度が多くの研究で用いられていること、本研究は被験者の数が少なく、因子分析を行うには十分ではないことを考慮して、中尾・加藤 (2004) の因子分析の結果に基づいた項目から下位尺度の得点を算出することとした。その結果、一回目の調査では、第 1 因子「見捨てられ不安 (18 項目)」は $\alpha = .92$ ($N=37$)、第 2 因子「親密性の回避 (12 項目)」は $\alpha = .86$ ($N=37$) であった。二回目の調査では、「見捨てられ不安」は $\alpha = .94$ ($N=36$)、第 2 因子「親密性の回避」は $\alpha = .89$ ($N=36$) とどちらの調査でも高い信頼性が認められた。

蓮華 (2008) で用いられている尺度には中尾・加藤 (2004) で削除されている「親密性の回避」の 6 項目が含まれており、蓮華 (2008) の追試部分については、同じ条件の方が議論しやすいことを考え、蓮華 (2008) の研究と同様に、「親密性の回避」18 項目を採用した結果も載せることとする。蓮華 (2008) の因子分析に基づいた尺度でも内的整合性を検討するために、下位尺度の α 係数を算出した。1 回目の調査では「見捨てられ不安 (18 項目)」で $\alpha = .92$ 、「親密性の回避 (18 項目)」で $\alpha = .82$ 、2 回目の調査では、「見捨てられ不安 (18 項目)」で $\alpha = .94$ 、「親密性の回避 (18 項目)」で $\alpha = .83$ と高い信頼性が得られた。

表1 一回目の調査における愛着スタイル尺度の因子分析結果

項目番号	項目	因子1	因子2
因子1：見捨てられ不安 ($\alpha = .92$)			
8	私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。	.80	.21
14	私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	.76	.33
22	私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。(逆)	.72	.05
6	私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	.72	.18
30	私は、私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう。	.71	-.02
32	私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする。	.70	-.23
2	私は、見捨てられるのではないかと心配だ。	.69	.04
12	私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	.67	-.04
10	私はいつも、人が私に対していてくれる気持ちが、私が人に対していてほしい気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う。	.66	-.17
4	私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している。	.64	.01
18	私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言う必要がある。	.63	-.08
26	私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う。	.61	.22
20	私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じる事がときどきある。	.57	-.12
16	私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	.56	-.24
24	私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら、私はきつと気が動転して、悲しくなったり腹が立つたりする。	.50	-.20
36	私は、知り合いが私をほっといて自分一人で何かをすることが重なってくると腹が立ってきてしまう。	.50	-.01
28	私は誰かと付き合っていないと、何となく不安で不安定な気持ちになる。	.49	.11
34	人にダメだなあと言われると、自分は本当にダメだなあを感じる。	.34	.13
因子2：親密性の回避 ($\alpha = .86$)			
31	私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。(逆)	-.15	.81
9	私は人に心を開くのに抵抗を感じる。	.29	.77
29	私は人に頼ることに抵抗がない。(逆)	-.07	.70
23	私は人とあまり親密になることがどちらかというと好きではない。	-.09	.64
15	私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない。(逆)	.12	.62
17	私は人とあまり親密にならないようにしている。	.07	.62
21	私は、自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う。	.20	.61
19	私は比較的容易に人と親密になれると思う。(逆)	-.05	.59
1	心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない。	.33	.46
27	私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う。(逆)	-.25	.43
3	私は、人と親密になることがとてもこちよい。(逆)	.02	.41
25	私は、人に何でも話す。(逆)	-.10	.39
因子寄与率(%)		25.35	41.49

※ (逆) は逆転項目を表す。

2) 防衛スタイル尺度について

今回の調査では、項目数よりもサンプル数が少なく、因子分析を行うことが適切でないために、因子分析は行わず、中西（1998）を基に、3つの下位概念「未熟な防衛」「神経症的な防衛」「成熟した防衛」に分類した（表2）。

内的整合性を検討するために、各水準の α 係数を算出したところ、一回目の調査では、「未熟な防衛」は $\alpha = .74$ 、「神経症的な防衛」は $\alpha = .48$ 、「成熟した防衛」は $\alpha = .54$ となった。二回目の調査では、「未熟な防衛」は $\alpha = .73$ 、「神経症的な防衛」は $\alpha = .69$ 、「成熟した防衛」は $\alpha = .41$ となった。神経症的な防衛と成熟した防衛の信頼性が未熟な防衛に比べて低いのは、項目数が少ないことが影響しているとも考えられる。再検査信頼性係数を算出したところ未熟な防衛において $r = .83$ ($p < .001$)、神経症的な防衛において $r = .70$ ($p < .001$)、成熟した防衛において $r = .84$ ($p < .001$)と高い信頼性が認められた。

表2 防衛スタイル尺度

項目番号	項目
未熟な防衛	
	7 人に利用されることが多い。
	31 人生において自分が不当な扱いを受けていると確信している。
	25 もし上司が私をいらいらさせたら、仕事でわざとミスしたり、ゆっくりやったりして仕返しする。
	38 たとえどれだけ不平を言っても、けっして満足のいくような回答を得られない。
	12 何かに悩まされている時には、しばしば衝動的に行動する。
	22 傷つけられると、あからさまに攻撃的になる。
	36 しばしば自分の感情を見せない人から言われる。
	39 激しい感情を引き起こすような状況においても、何も感じないことがしばしばある。
	11 うめばれている人の鼻をへし折る能力は私の誇りだ。
	14 とても内気な人間だ。
	16 実生活でよりも空想で満足を得る事が多い。
	19 現実の生活においてよりも空想において物事をやり遂げる。
	9 不愉快な事実を、それがまるで存在しないかのように無視する傾向がある、と人から言われる。
	20 私は何も恐れない。
	33 医者は私のどこが悪いのか、けっして本当にはわからない。
	35 落ち込んでいたり不安な時には、食べることで気分が良くなる。
	10 自分がまるで不死身であるかのように危険を無視する。
	17 問題なく人生をやり過ごせるような特別な才能をもっている。
	21 ある時には自分が天使であると思ひ、ある時には悪魔であると思う。
	24 私の知っているかぎりでは、人は善か悪かのいずれかである。
	4 やる事には何でも、正当な理由を見つかることができる。
	18 物事がうまくいかない時にはもっともな理由がある。
	13 物事がうまくいかない時には体の具合が悪くなる。
	29 好きでないことをしなければならぬ時には頭が痛くなる。
神経症的な防衛	
	34 自分の権利のために戦った後で、その主張について謝る傾向がある。
	42 もし攻撃的な考えをもったら、それを打ち消すために何かをする必要性を感じる。
	1 私は他人を助けることで満足を得る。もし、助ける機会を取り上げられたら、気分が沈むだろう。
	41 もし危機にあつたら、同じ問題を抱えている人を捜し出すだろう。
	23 知っている誰かが自分の守り神のようだといつも感じている。
	26 何でもすることができて、絶対的に公平かつ公正である人が知人にいる。
	8 もし誰かが私を襲ってお金を盗んだとしても、罰せられるより犯人がそのお金で助かることを望む。
	30 当然怒りを感じるべき人に対して、自分がとても親切であることにしばしば気がつく。
成熟した防衛	
	3 不安を抑えるために何か建設的かつ創造的なことをする(例えば描画や工作)。
	40 手近な仕事に集中することで、気分が沈んだり不安になったりすることを選ばれる。
	6 自分の失敗を笑いに変えることが容易にできる。
	28 苦しい状況でも、そのおもしろい側面を見つけることができる。
	32 困難な状況に出会うことが分かった時には、その内容を予測し対策を立てる。
	37 悲しい出来事が事前に予測できたなら、それにもっとうまく対応することができる。
	2 問題を処理する時間ができる時まで、その問題を考えないようにしておく。
	27 自分の活動の妨げになるような感情を私は抑え続けることができる。

(2) 愛着と防衛との関連について

愛着と防衛の関連を明らかにするため、相関係数を算出した (表 3)。その結果、一回目の調査では、見捨てられ不安と未熟な防衛、神経症的な防衛との間に正の有意な相関が得られ、見捨てられ不安と成熟した防衛との間には有意な負の相関がみられた。二回目の調査では、見捨てられ不安と未熟な防衛との間に正の有意な相関がみられたが、神経症的な防衛や、成熟した防衛との間には有意な相関がみられなかった。親密性の回避については、防衛スタイルとの間に有意な相関がみられなかった。

蓮華 (2008) に従い、「親密性の回避」の得点を算出した場合 (18 項目) と、中尾・加藤 (2004) に従った場合 (12 項目) を比較すると、相関係数の値は多少異なるものの、どちらも有意な相関がなく、結果は同じものとなった。そこで、本来中尾・加藤 (2004) の作成した尺度では「親密性の回避」の 6 項目を削除しているために、これ以降の分析では、中尾・加藤 (2004) に従い、「見捨てられ不安」18 項目、「親密性の回避」12 項目で分析を行うこととする。

表 3 IWM と防衛との相関

		未熟な防衛	神経症的な防衛	成熟した防衛
	見捨てられ不安	.50 **	.33 *	-.34 *
調査一回目	親密性の回避 (18項目)	.23	.01	-.03
	親密性の回避 (12項目)	.13	-.12	.01
	見捨てられ不安	.34 *	.22	-.27
調査二回目	親密性の回避 (18項目)	.30	-.10	-.06
	親密性の回避 (12項目)	.25	-.18	-.09

※** $p < .01$, * $p < .05$.

(3) IWM の変化と防衛との関連について

一回目の調査と二回目の調査からどの程度 IWM 得点が変わったかを表す得点を算出した (図 1, 2)。この得点は、前回の調査より IWM がどの程度変化したのか (変化の方向は加味していない) を表すものであり、得点が高いほど、前回の調査と比較して変化があることを表す。

この得点と一回目調査時の防衛、二回目調査時のライフイベントとの相関係数を算出した (表 4)。その結果、見捨てられ不安の変化は、未熟な防衛、神経症的な防衛、ネガティブライフイベントとの間に有意な正の相関があった。また、親密性の回避の変化は未熟な防衛との間に有意な正の相関があった。

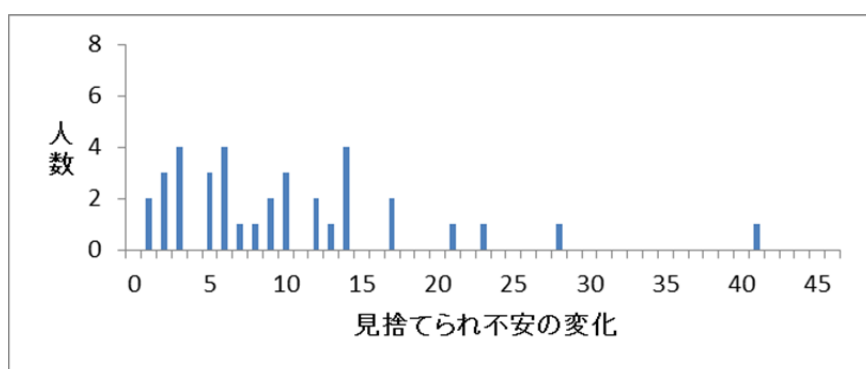


図 1 見捨てられ不安の変化の分布

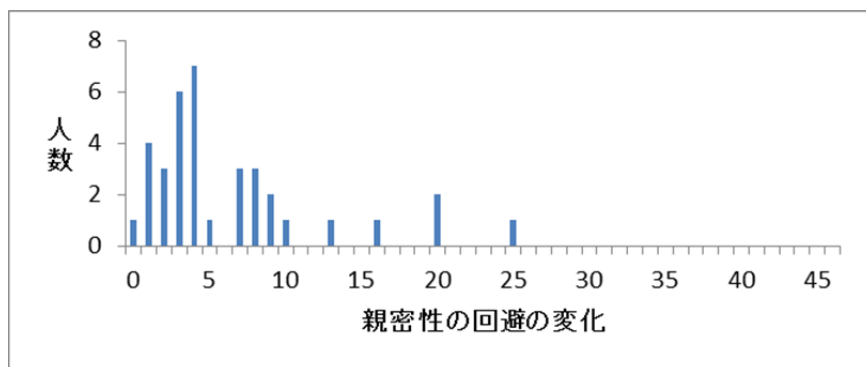


図 2 親密性の回避の変化の分布

表 4 IWM の変化と防衛との相関

	未熟な防衛	神経症的な防衛	成熟した防衛	ネガティブライフイベント	ポジティブライフイベント
見捨てられ不安の変化	.43 **	.52 **	.30	.38 **	.08
親密性の回避の変化	.39 *	.05	-.10	.13	.01

※** $p < .01$, * $p < .05$.

一口に変化といっても、その得点が正の方向に変化するのと、負の方向に変化するのでは、異なる意味を持つと考えられる。そこで、二回目調査時の IWM 得点から、一回目調査時の IWM 得点を引いた得点を算出した（図 3, 4）。この得点が 0 であるならば IWM が変化していないことを表し、正であるならば見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から高くなったことを表し、負であるならば、見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から低くなったことを表す。

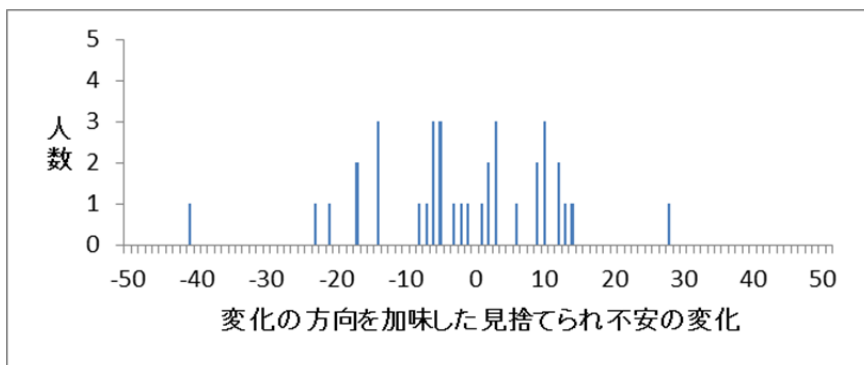


図 3 変化の方向を加味した見捨てられ不安の変化の分布

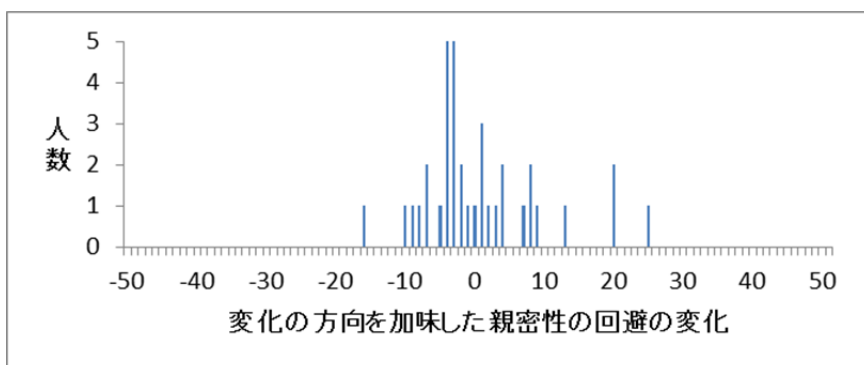


図 4 変化の方向を加味した親密性の回避の変化の分布

その得点を基に、見捨てられ不安、親密性の回避それぞれが前回の調査より低くなった、あるいは高くなった者に分けて IWM の変化と防衛との相関係数を算出した (表 5)。

表 5 変化の方向別に分類した群ごとの IWM の変化と防衛、IWM の変化とライフイベントの相関

	未熟な防衛	神経症的な防衛	成熟した防衛	ネガティブ ライフイベント	ポジティブ ライフイベント
見捨てられ不安が 低くなった群 (N=19) の見捨てられ不安の変化	.65 **	.54 *	.26	.37	.26
見捨てられ不安が 高くなった群 (N=17) の見捨てられ不安の変化	-.08	.56 *	.48 †	.08	.29
親密性の回避が 低くなった群 (N=20) の親密性の回避の変化	.24	.04	.04	.11	-.05
親密性の回避が 高くなった群 (N=15) の親密性の回避の変化	.35	.01	-.20	.51 †	.08

※** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$.

見捨てられ不安が低くなった群についての分析では、見捨てられ不安の変化は未熟な防衛、神経症的な防衛との間に有意な正の相関があった。見捨てられ不安が高くなった群についての分析では、見捨てられ不安の変化は神経症的な防衛と成熟した防衛との間に有意な正の相関があった。神経症的な防衛は見捨てられ不安が低くなった群、見捨てられ不安が高くなった群のどちらでも、見捨てられ不安との間に有意な正の相関が認められているが、同じように神経症的な防衛を用いるにも関わらず、変化の仕方が変わることは考えにくいために、どちらかの群における相関は疑似相関であると考えた。そのため、未熟な防衛を統制して、偏相関係数を算出したところ、見捨てられ不安が低くなった群においての見捨てられ不安と神経症的な防衛との間の偏相関係数は $r = .17$ (*n.s.*) であり、未熟な防衛が制御変数であることが確認された。そこで、見捨てられ不安が高くなった群においてのみ、見捨てられ不安の変化が大きいほど神経症的な防衛を行っていると考えられるだろう。そのため未熟な防衛を多く行う者は、見捨てられ不安が低くなっており、神経症的な防衛や成熟した防衛を多く行う者は、見捨てられ不安が高くなることが示されたと思われる。親密性の回避の変化については、親密性の回避が高くなった群において、ネガティブライフイベントと有意な正の相関があった。

(4) 対人関係観が変わったときのライフイベントについて

対人関係観が変化した時にどのようなライフイベントを経験したのかを調査参加者に自由記述式で回答してもらい、そのライフイベントを今回使用したライフイベント尺度に沿うように分類した(表6)。ほぼすべてのライフイベントが今回用いた尺度内で分類され、尺度の項目に該当しないものは1項目のみであった。

表6 自由記述から得られたライフイベントの分類結果

ライフイベント		一カ月間の間に経験し、対人関係観の変化につながった者(名)	過去に経験し、対人関係観の変化につながった者(名)
ネガティブ ライフイベント	信頼していた人に裏切られた。		2
	友人、恋人との関係がダメになった。	1	3
	陰で悪口をいわれた。		2
	友人や仲間から批判されたり、からかわれたりした。		1
	家族、友人、恋人などと、けんか、口論をした。		2
	家族、友人、恋人などに、自分の欠点を指摘された(または、注意された)。		1
友人の悩みやトラブルに関わりを持った。	1		
ポジティブ ライフイベント	恋人ができた。	1	3
	一緒に楽しめる友人が増えた。	1	6
	人から理解された。	1	
	家族、友人、恋人、先生などに助けてもらった。		2
	仲間とおしゃべりを楽しんだ。	3	1
	家族、友人、恋人から電話があった。		1
	(ライフイベント尺度には含まれていない項目) TV番組の出演者に影響を受けた。		1

今回の調査では、対人関係観が変化したときのことについて想起してもらい、その変化をどう認知しているかについても尋ねた。その結果、ネガティブライフイベントを経験したからと言って、それはよくないものであったと認知する者だけでなく、ネガティブライフイベントを経験しても、それはよいものであったと認知する者もいた。反対に、ポジティブライフイベントを経験した者も必ずしもそれをよいものであると認知しているわけではなく、中にはどちらともいえないものであったと認知している者もいた(表7)。

表7 過去のライフイベントとそれに対する認知

		変化についての認知		
		よいものだった	どちらともいえない	よくないものだった
一カ月間に 経験したライフイベント	ネガティブライフイベント		1	1
	ポジティブライフイベント	5	1	
過去に経験したライフイベント	ネガティブライフイベント	1	3	5
	ポジティブライフイベント	14	1	1

第4節 考察

(1) 愛着スタイルと防衛スタイルの関連について

調査一回目の結果から、見捨てられ不安が高い者は、未熟な防衛、神経症的な防衛が高く、成熟した防衛が低いことが明らかとなった。二回目の調査では、見捨てられ不安と未熟な防衛との関連以外は有意な関連が認められなかったが、相関係数を見ると、一回目調査時と同じ傾向であり、十分なサンプル数で調査を行えば有意になる程の値であったので、今回有意な関連が認められなかったのは、サンプル数が少なかったことが一因とも考えられる。二回目の調査では一部のみでしか有意な関連が認められなかったが、予備調査の結果全体から、見捨てられ不安と防衛は関連があることが確かめられたといえよう。この結果は蓮華（2008）の結果と同様である。

今回の調査では蓮華（2008）にならい、中尾・加藤（2004）で削除されていた親密性の回避の6項目も用い、削除した場合（12項目）とそうでない場合（18項目）の比較を行ったが、結果に大きな差はなかったため、後に続く本調査においては、中尾・加藤（2004）で削除されていた項目は扱わないこととする。

Balint（1968 中井訳 1978）は、愛着対象から分離させられることに不安を感じている者は、愛着対象の気持ちも考えられない程に、対象へしがみつくような防衛を行い、愛着対象との間で何らかの不協和音が生じれば、激しい攻撃性をみせることも指摘している。さらにこのような関係が生じるには、その対象に対する過大評価があるとも述べている。また、加藤（1985）は、自分が見捨てられるかもしれないという恐怖感を抱いている者は、実際の自分とは反対の自分を誇示しようとするとして述べている。このような理由から、見捨てられ不安の高い者は、行動化してしまうような防衛である未熟な防衛や、相手を理想化したり、反動形成をとるような神経症的な防衛が高いのではないかと考えられる。

親密性の回避については、蓮華（2008）の研究では親密性の回避は未熟な防衛との間に有意な正の相関が認められていたが、本研究では、二回の調査とも防衛との有意な相関が認められなかった。しかし、今回の調査での親密性の回避と未熟な防衛との相関係数を見ると、十分なサンプル数で調査を行えば有意になる程の値であったので、今回有意な関連が認められなかったのは、サンプル数が少なかったことが一因とも考えられる。

(2) IWM の変化、防衛、ライフイベントとの関連について

本研究では、先行研究の知見や、Bowlby (1980 黒田ら訳 1981)の理論に従い、対人関係についてのライフイベントを多く経験する者や、防衛的排除を行わない者ほど IWM が変化しやすいのかということ調査することを目的とした。

今回の研究では、一か月という短期間の変化に注目したが、少ないサンプル数の中でも IWM の数値が大幅に変化している者がいたことや、自由記述の回答においても対人関係観が変化したとを感じる者もいたことから、一か月という短期間においても IWM は変化することが示された。

見捨てられ不安の変化は、未熟な防衛、神経症的な防衛、ネガティブライフイベントとの間に有意な正の相関がみられ、未熟な防衛、神経症的な防衛が高く、ネガティブライフイベントを多く経験している者ほど、見捨てられ不安の変化が大きいことが明らかとなった。未熟な防衛や神経症的な防衛が高い者は、見捨てられ不安の変化が大きいという結果や、未熟な防衛が高い者は、親密性の回避の変化が大きいという結果は仮説 1 に反するものであり、仮説 1 は支持されなかった。だが、ネガティブライフイベントを多く経験している者ほど、見捨てられ不安の変化が大きいという結果は、ネガティブライフイベントを多く経験した者は IWM が変化しやすいという先行研究の知見 (e.g., Hamilton, 2000; Waters ら, 2000; Weinfield ら, 2000) と一致しており、仮説 2 を一部支持するものであった。

本研究ではただ IWM が変化することのみでなく、IWM がどのように変化するのかということも考慮に入れて分析を行った。その結果、見捨てられ不安が低くなった群において、見捨てられ不安の変化が大きいほど未熟な防衛を行うことが示された。また、見捨てられ不安が高くなった群において、変化が大きいほど神経症的な防衛を多く行うことが示された。この結果は、どのような種類の防衛を行うかにより、見捨てられ不安がどのように変化するのが異なることを示唆しており、防衛と IWM の変化の間には、Bowlby (1980 黒田ら訳 1981)が想定した一元的なものよりも、より複雑なメカニズムが存在することも考えられる。ネガティブライフイベントを経験している者は、親密性の回避が高くなっており、ネガティブライフイベントを経験すると IWM がネガティブな方向に変化するという仮説 3 は一部支持された。

今回の調査において、IWM が変化したと思う時期に起こったライフイベントについて収集したところ、ほぼすべての回答が今回使用したライフイベント尺度に含まれていたため、今回使用したライフイベント尺度は IWM の変化を探る要因になりうるライフイベントを含んでいるものと思われる。そこで、引き続き行う予定である本調査においても、この尺度を使うこととする。

過去のライフイベントの経験とそれに対する認知の関連を検討したところ、ネガティブライフイベントを経験しても必ずしもそれが悪い変化につながったと認知していない者や、反対に、ポジティブライフイベントを経験しても必ずしもそれがよい変化につながったと認知していない者もいた。このことより、単にライフイベントのみが影響を与えるのでは

なく、何らかの個人の特性と関連しあって、IWM の変化に影響を与えていると思われる。

第5節 まとめ

予備調査により、IWM の変化、防衛、及びライフイベントとの関連を検討したところ、関連は認められ、仮説 2 と仮説 3 は一部支持され、仮説 1 と仮説 4 は支持されなかった。分析の結果、IWM の変化と防衛との間には当初想定していた単純な相関関係ではなく、どのような防衛をとるのかの違いにより、どのように IWM の変化に影響を与えるのかが異なるということが示唆された。また、単純にライフイベントの経験だけでなく、個人の特性が変化をどう認知しているのかについて関わっていることも示唆されたために、今後はその点についても分析を行っていききたい。

今後はより詳細な分析を行うためにも、本調査を行う。予備調査により、一か月という短期間でも IWM が変化することが示されたので、本調査においても一か月の調査間隔をとり、縦断研究を行うこととする。サンプル数を増やして行う本調査では予備調査で有意にならなかった部分についても有意になる可能性があるため、予備調査においてみられた傾向が確かめられるのかを確認していくとともに、新たな知見を増やしていきたいと思う。

第三章 本調査

第1節 目的

予備調査から、一か月という短期間でも IWM が変化することが示されたので、本調査においても一か月の調査間隔をとり、縦断研究を行うこととする。サンプル数を増やして行う本調査ではより詳細な分析が可能となるため、ライフイベントと防衛の組み合わせの効果などについても分析を行い、引き続き、以下の仮説を検証することを目的とする。

仮説 1：防衛が低い者ほど IWM が変化しやすい。

仮説 2：ライフイベントを多く経験している者ほど IWM が変化しやすい。

仮説 3：ネガティブライフイベントを多く経験した者ほど、IWM がネガティブな方向に変化する（見捨てられ不安や親密性の回避が高くなる）。

仮説 4：ポジティブライフイベントを多く経験した者ほど、IWM がポジティブな方向に変化する（見捨てられ不安や親密性の回避が低くなる）。

第2節 方法

- (1) 調査対象 大学生を対象とし、二回の調査とも、回答に不備のない者 196 名(男性 89 名、女性 107 名)を対象とした。
- (2) 手続き 授業時間に質問紙を配布、授業終了後回収を行った。
- (3) 調査時期 一回目の調査を 2013 年 10 月に、二回目の調査を 2013 年 11 月に行った。一回目の調査から二回目の調査までの期間は一か月である。
- (4) 質問紙の構成
それぞれの尺度は予備調査で使用したのと同じものを用いた。

1) 調査一回目の質問紙

a.属性

b.防衛スタイル尺度

c.一般他者愛着スタイル尺度

2) 調査二回目の質問紙

a.防衛スタイル尺度

b.ライフイベント尺度

c.一般他者愛着スタイル尺度

第3節 結果

本研究においては、IWM の変化の研究が未だに少数であること、先行研究では得られなかった知見が新たに得られたことを加味して研究の可能性を広げるため、10%の有意水準までを有意であるとみなして論を進めることとする。

(1) 愛着スタイル尺度と防衛スタイル尺度の構成

1) 愛着スタイル尺度について

一回目の調査では、第1因子「見捨てられ不安」は $\alpha = .91$ 、第2因子「親密性の回避」は $\alpha = .74$ であった。二回目の調査では、「見捨てられ不安」は $\alpha = .93$ 、第2因子「親密性の回避」は $\alpha = .81$ とどちらの調査でも高い信頼性が認められた。また、再検査信頼性係数も算出したところ見捨てられ不安において $r = .75$ ($p < .001$)、親密性の回避において $r = .80$ ($p < .001$) と高い信頼性が認められた。

愛着スタイルに性差があるかどうかを検討するため、t検定を行ったところ、二回の調査結果とも、有意な差は示さなかった(表8)。

表8 愛着スタイルについての平均値と性差比較結果

	男性	女性	t検定結果
1回目調査時の見捨てられ不安	65.14	66.44	<i>n.s.</i>
1回目調査時の親密性の回避	47.96	46.34	<i>n.s.</i>
2回目調査時の見捨てられ不安	65.18	66.84	<i>n.s.</i>
2回目調査時の親密性の回避	46.97	45.47	<i>n.s.</i>

2) 防衛スタイル尺度について

防衛スタイル尺度の因子分析を行ったが、先行研究のような因子構造とならなかった。先行研究の方がサンプル数が多いため、先行研究の因子構造に従い、下位尺度の得点を算出することとする。

内的整合性を検討するために、各水準の α 係数を算出した。一回目の調査では、「未熟な防衛」は $\alpha = .76$ 、「神経症的な防衛」は $\alpha = .63$ 、「成熟した防衛」は $\alpha = .50$ となった。二回目の調査では、「未熟な防衛」は $\alpha = .81$ 、「神経症的な防衛」は $\alpha = .69$ 、「成熟した防衛」は $\alpha = .58$ となった。神経症的な防衛と成熟した防衛の信頼性が未熟な防衛に比べて低いのは、項目数が少ないことが影響しているとも考えられる。再検査信頼性係数を算出したところ未熟な防衛において $r = .62$ ($p < .001$)、神経症的な防衛において $r = .49$ ($p < .001$)、成熟した防衛において $r = .56$ ($p < .001$)であった。

防衛に性差があるかどうかを検討するため、 t 検定を行ったところ、1回目調査時の神経症的な防衛と2回目調査時の未熟な防衛において有意な差が示された(表9)。しかし、2回の調査のうち一方のみでしか有意な差が認められなかったことや、効果量を算出したところ、1回目調査時の神経症的な防衛では $d = .33$ 、2回目調査時の未熟な防衛では $d = .29$ とともに効果量が小さかったことから、本調査では性差について取り扱わないこととする。

表9 防衛尺度についての平均値と性差比較結果

	男性	女性	t 検定結果
1回目調査時の未熟な防衛	101.03	97.74	<i>n.s.</i>
1回目調査時の神経症的な防衛	33.63	36.56	$t(194) = 2.28, p < .05$
1回目調査時の成熟した防衛	40.02	39.04	<i>n.s.</i>
2回目調査時の未熟な防衛	108.65	102.36	$t(194) = 2.02, p < .05$
2回目調査時の神経症的な防衛	35.19	35.78	<i>n.s.</i>
2回目調査時の成熟した防衛	39.01	39.78	<i>n.s.</i>

(2) 愛着と防衛との関連について

愛着と防衛の関連を明らかにするため、相関係数を算出した（表 10）。その結果、一回目の調査、二回目の調査ともに、見捨てられ不安と未熟な防衛、神経症的な防衛との間に正の有意な相関がみられた。親密性の回避については、神経症的な防衛との間に有意な負の相関がみられた。

表 10 IWM と防衛との相関

		未熟な防衛	神経症的な防衛	成熟した防衛
調査一回目	見捨てられ不安	.51 ***	.47 ***	.06
	親密性の回避	.03	-.16 *	.04
調査二回目	見捨てられ不安	.51 ***	.45 ***	-.02
	親密性の回避	.11	-.21 **	-.09

※*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$.

さらに、IWM の 4 類型を独立変数に、防衛を従属変数にして 1 要因分散分析を行った（表 11）。その結果、1 回目調査時において、未熟な防衛と神経症的な防衛において有意差が見られ、（順に $F(3,192)=10.31$, $p<.001$; $F(3,192)=15.73$, $p<.001$ ）、同じく二回目調査時でも未熟な防衛、神経症的な防衛において有意差が見られた（順に $F(3,192)=7.33$, $p<.001$; $F(3,192)=6.15$, $p=.001$ ）。1 回目調査時では、未熟な防衛においては、安定型がとらわれ型と恐れ型よりも、拒絶型がとらわれ型よりも、有意に値が低かった。神経症的な防衛においては、安定型と拒絶型が、とらわれ型と恐れ型よりも有意に値が低かった。2 回目調査時では、未熟な防衛においては、安定型がとらわれ型と恐れ型よりも、拒絶型が恐れ型よりも、有意に値が低かった。神経症的な防衛においては、1 回目調査時と同じく、安定型と拒絶型が、とらわれ型と恐れ型よりも有意に値が低いという結果が得られた。二度の調査より、安定型がとらわれ型と恐れ型よりも有意に未熟な防衛が低く、安定型と拒絶型がとらわれ型と恐れ型よりも有意に神経症的な防衛の値が低いという結果は一貫して得られた。

表 11 愛着類型ごとの防衛の平均値・多重比較結果

	安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	多重比較結果※
1回目調査時未熟な防衛	89.26	94.5	108.96	102.8	安<と・恐 拒<と
1回目調査時神経症的な防衛	32.72	30.12	40.2	37.4	安・拒<と・恐
2回目調査時未熟な防衛	95.17	101.72	110.04	113.47	安<と・恐 拒<恐
2回目調査時神経症的な防衛	33.23	32.36	38.35	37.87	安・拒<と・恐

※安は安定型、拒は拒絶型、とはとらわれ型、恐は恐れ型を表す。

(3) 愛着とライフイベントの関連

愛着とライフイベントの関連を明らかにするため、一回目調査時の IWM とライフイベントとの相関係数を算出した (表 12)。その結果、見捨てられ不安との間に有意な相関は認められなかったが、親密性の回避については、ポジティブライフイベントとの間に有意な負の相関がみられた。

表 12 愛着とライフイベントとの関連

	ネガティブライフイベント	ポジティブライフイベント
見捨てられ不安	.14	.10
親密性の回避	-.05	-.20 *

※* $p<.05$.

さらに、IWM の 4 類型を独立変数に、従属変数をライフイベントにして 1 要因分散分析を行った (表 13)。その結果、ネガティブライフイベントとポジティブライフイベントの両方において有意差が見られた (順に $F(3,192)=2.75, p<.05$; $F(3,192)=7.73, p<.001$)。ネガティブライフイベントにおいては、とらわれ型が拒絶型よりも、有意に値が高かった。ポジティブライフイベントにおいては、安定型ととらわれ型が拒絶型よりも有意に値が高く、さらに、とらわれ型は恐れ型よりも有意に値が高かった。

表 13 愛着類型ごとのライフイベントの平均値・多重比較結果

	安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	多重比較結果※
ネガティブライフイベント	7.11	5.65	9.82	6.2	拒<と
ポジティブライフイベント	9.26	6.8	10.62	7.73	拒<安・と, 恐<と

※安は安定型、拒は拒絶型、とはとらわれ型、恐は恐れ型を表す。

(4) IWM の変化と防衛との関連について

一回目の調査と二回目の調査からどの程度得点が変わったかを表す得点を算出した (図 5,6)。この得点は、前回の調査より IWM がどの程度変化したのか (変化の方向は加味していない) を表すものであり、得点が高いほど、前回の調査と比較して変化があることを表す。

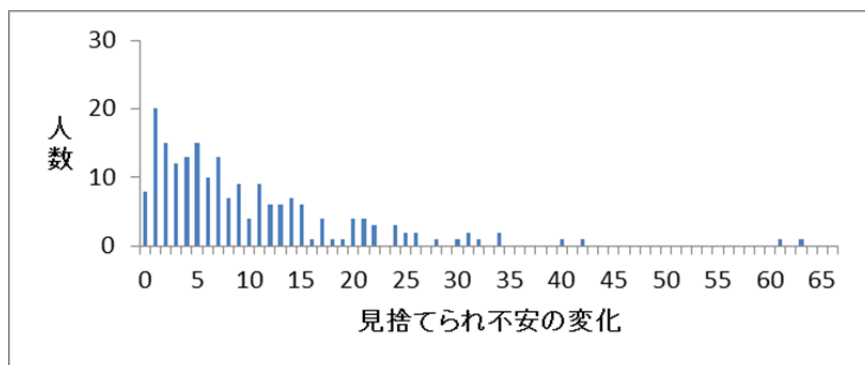


図 5 見捨てられ不安の変化の分布

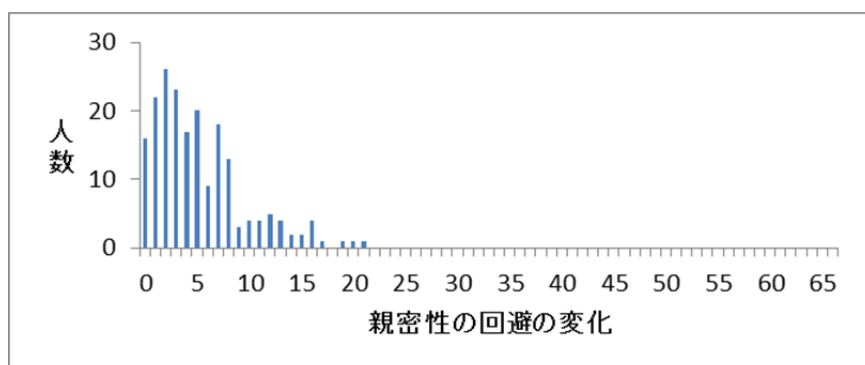


図 6 親密性の回避の変化の分布

この得点と一回目調査時の防衛、二回目調査時のライフイベントとの相関係数を算出した (表 14)。その結果、見捨てられ不安の変化は、ネガティブライフイベントとの間に有意な正の相関があった。しかし、IWM の変化と防衛の間には相関はみられなかった。

表 14 IWM の変化と防衛、ライフイベントとの相関

	未熟な防衛	神経症的な防衛	成熟した防衛	ネガティブ ライフイベント	ポジティブ ライフイベント
見捨てられ不安の変化	.04	-.05	.00	.19 **	-.04
親密性の回避の変化	.03	.03	.03	-.05	-.01

※** $p < .01$.

一口に変化といっても、その得点が正の方向に変化するのと、負の方向に変化するのでは、異なる意味を持つと考えられる。そこで、二回目調査時の IWM 得点から、一回目調査時の IWM 得点を引いた得点を算出した（図 7, 8）。この得点が 0 であるならば IWM が変化していないことを表し、正であるならば見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から高くなったことを表し、負であるならば、見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から低くなったことを表す。

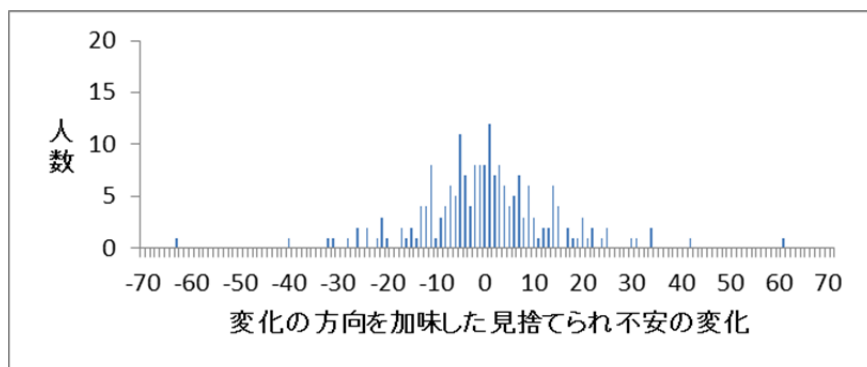


図 7 変化の方向を加味した見捨てられ不安の変化の分布

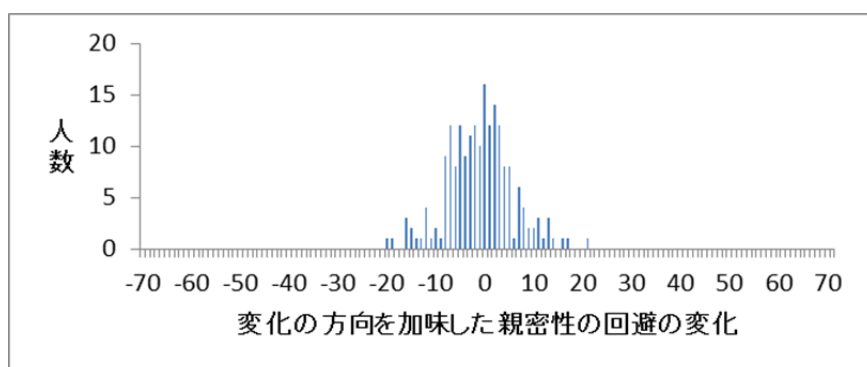


図 8 変化の方向を加味した親密性の回避の変化の分布

その得点を基に、見捨てられ不安、親密性の回避それぞれが前回の調査より低くなった、あるいは高くなった者の群に分けて防衛との相関係数を算出した（表 15）。

表 15 変化の方向別に分類した群ごとの IWM の変化と防衛、ライフイベントの相関

	未熟な防衛	神経症的な防衛	成熟した防衛	ネガティブ ライフイベント	ポジティブ ライフイベント
見捨てられ不安が 低くなった群（N=93） の見捨てられ不安の変化	.18 †	.28 **	.10	.13	.02
見捨てられ不安が 高くなった群（N=95） の見捨てられ不安の変化	-.15	-.40 ***	-.15	.20 †	-.14
親密性の回避が 低くなった群（N=100） の親密性の回避の変化	-.07	-.01	-.06	.03	.08
親密性の回避が 高くなった群（N=80） の親密性の回避の変化	.11	.10	.15	-.09	-.08

※*** $p<.001$, ** $p<.01$, † $p<.10$.

見捨てられ不安が低くなった群では、見捨てられ不安の変化は未熟な防衛、神経症的な防衛との間に有意な正の相関があった。見捨てられ不安が高くなった群では、見捨てられ不安の変化は神経症的な防衛との間に有意な負の相関が、ネガティブライフイベントとの間に有意な正の相関があった。神経症的な防衛を統制して、偏相関係数を算出したところ、見捨てられ不安が低くなった群においての見捨てられ不安の変化と未熟な防衛との間の偏相関係数は $r=.13$ (*n.s.*) であり、神経症的な防衛が制御変数であることが確認された。そこで、見捨てられ不安が低くなった群においては、見捨てられ不安の変化が大きいほど神経症的な防衛を行うことが明らかにされた。

愛着スタイル尺度は平均値を基に類型化して用いられることから、単なる数値の増減も重要な測度であるが、平均値をまたぐような変化をしているかどうかという点も重要な変化をとらえる視点であると思われる。一回目調査時の見捨てられ不安の平均値と二回目調査時の見捨てられ不安の平均値には有意な差がみられず ($t(194)=.12, n.s.$)、一回目調査時の親密性の回避の平均値と二回目調査時の親密性の回避の平均値にも有意な差がみられなかった ($t(194)=.58, n.s.$) ため、見捨てられ不安、親密性の回避のそれぞれの平均値をカッピングポイントとし、それぞれの IWM の数値が平均よりも高い者を不安低群、低い者を安定群とし、二回の測定の間個人が属する群が変化しているかに注目した。そして 1 回目調査時、2 回目調査時ともに群が変わらなかった者と、変化した者との防衛とライフイベントを比較した。見捨てられ不安について、安定群から変化しなかった群と変化した群を比較したところ (表 16a)、ネガティブライフイベントで有意な差が見られ、安定群から不安定群に変化した群の方が安定群のままであった群よりも有意にネガティブライフイベントを多く経験していた。不安定群から変化しなかった群と変化した群を比較したところ (表 16b)、未熟な防衛で有意な差が見られ、不安低群のままであった群の方が不安低群から安定群に変化した群よりも有意に未熟な防衛が高かった。

表 16 見捨てられ不安が変化した群と変化しなかった群との比較

(a) 安定群から変化しなかった群と変化した群との比較

	安定群のまま(N=75)	安定群から不安定群に変化(N=21)	t検定結果
未熟な防衛	90.76	96.38	n.s.
神経症的な防衛	31.57	30.62	n.s.
成熟した防衛	40.39	37.48	n.s.
ネガティブライフイベント	5.99	9.62	$t(25.68)=1.98, p<.10$
ポジティブライフイベント	7.87	8.38	n.s.

(b) 不安定群から変化しなかった群と変化した群との比較

	不安定群のまま(N=78)	不安定群から安定群に変化(N=22)	t検定結果
未熟な防衛	108.32	98.64	$t(98)=1.98, p=.05$
神経症的な防衛	38.79	39.46	n.s.
成熟した防衛	39.14	39.55	n.s.
ネガティブライフイベント	9.32	7.64	n.s.
ポジティブライフイベント	9.48	8.77	n.s.

親密性の回避について、安定群から変化しなかった群と変化した群を比較したところ、(表 17a)、神経症的な防衛とポジティブライフイベントで有意な差が見られ、安定群のままであった群の方が、安定群から不安定群に変化した群よりも有意に神経症的な防衛が高く、ポジティブライフイベントを多く経験していた。不安定群から変化しなかった群と変化した群を比較したところ (表 17b)、どの項目においても有意な差はみられなかった。

表 17 親密性の回避が変化した群と変化しなかった群との比較

(a) 安定群から変化しなかった群と変化した群との比較

	安定群のまま(N=80)	安定群から不安定群に変化(N=22)	t検定結果
未熟な防衛	100.01	99.27	n.s.
神経症的な防衛	37.84	32.82	t(100)=2.56, p=.01
成熟した防衛	39.81	37.41	n.s.
ネガティブライフイベント	8.64	8.27	n.s.
ポジティブライフイベント	10.43	8.55	t(100)=1.72, p<.10

(b) 不安定群から変化しなかった群と変化した群との比較

	不安定群のまま(N=70)	不安定群から安定群に変化(N=24)	t検定結果
未熟な防衛	100.27	95.58	n.s.
神経症的な防衛	34.30	31.46	n.s.
成熟した防衛	40.06	38.63	n.s.
ネガティブライフイベント	7.64	5.75	n.s.
ポジティブライフイベント	7.24	7.04	n.s.

(5) 防衛とライフイベントが IWM の変化に及ぼす影響について

独立変数を、一回目調査時の防衛（未熟な防衛、神経症的な防衛、成熟した防衛）と二回目調査時のライフイベント（ネガティブライフイベント、ポジティブライフイベント）とし、従属変数を IWM の変化（見捨てられ不安の変化、親密性の回避の変化）として重回帰分析を行った（図 9, 有意なパスがあったものだけを掲載）。

その結果、ネガティブライフイベントから見捨てられ不安へは有意な正のパスが、ポジティブライフイベントから見捨てられ不安の変化へは有意な負のパスがみられた。

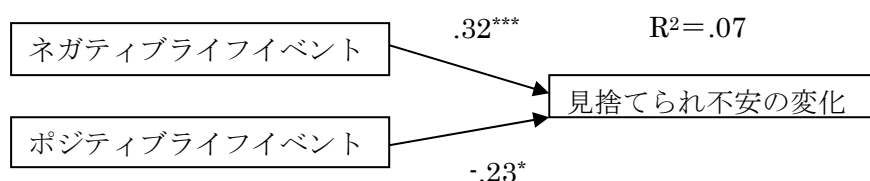


図 9 見捨てられ不安の変化についての重回帰分析の結果

※*** $p<.001$, * $p<.05$.

上記の分析で、防衛と IWM の変化との有意な関係がみられなかったために、独立変数は変えず、従属変数を変化の方向を加味した IWM の変化（この得点が 0 であるならば IWM が変化していないことを表し、正であるならば見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から高くなったことを表し、負であるならば、見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から低くなったことを表す。）にして、再度重回帰分析を行った（図 10, 有意なパスがあったものだけを掲載）。

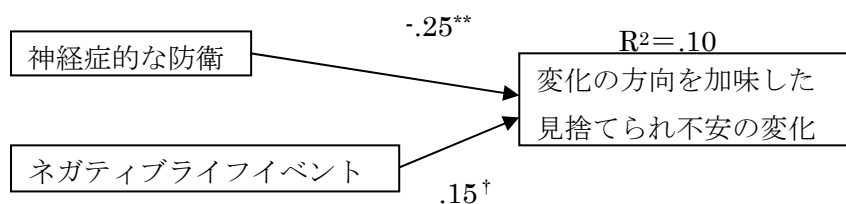


図 10 変化の方向を加味した、見捨てられ不安の変化についての重回帰分析

※** $p<.01$, † $p<.10$.

その結果、神経症的な防衛から、見捨てられ不安へ有意な負のパスが、ネガティブライフイベントから見捨てられ不安の変化へ有意な正のパスがみられた。

(6) 防衛と IWM の因果関係について

表 18 は防衛（未熟な防衛・神経症的な防衛・成熟した防衛）と IWM（見捨てられ不安・親密性の回避）について交差遅延効果モデル(図 11)と同時効果モデル(図 12)を用いた分析結果（各モデルにおけるパスの標準化回帰係数）である。交差遅延効果モデルにおける β_1 は 1 時点目の IWM が 2 時点目の同一変数に与える影響、 β_2 は 1 時点目の防衛が 2 時点目の同一変数に与える影響、 β_3 は 1 時点目の IWM が 2 時点目の防衛に与えるラグを考慮した影響、 β_4 は 1 時点目の防衛が 2 時点目の IWM に与えるラグを考慮した影響を示している（表 20a）。同時効果モデルにおける β_1 と β_2 は交差遅延効果モデルと同様に、2 時点目の IWM と防衛が 1 時点目の同一変数から受ける影響を示している。 β_3 と β_4 は 2 時点目における IWM が防衛に与える影響、防衛が IWM に与える影響をそれぞれ示している（表 20b）。

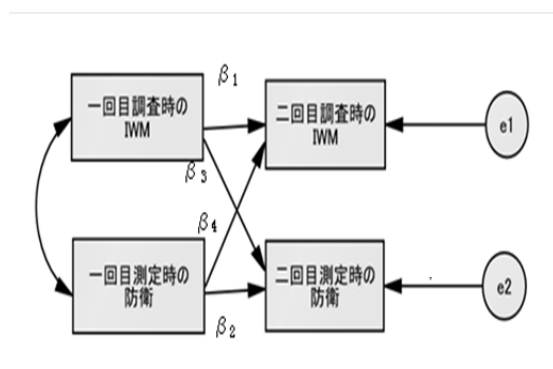


図 11 交差遅延効果モデル

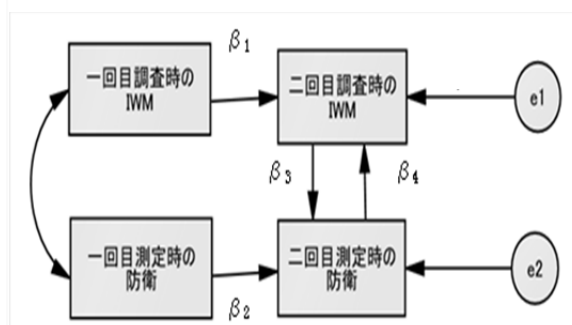


図 12 同時効果モデル

まず、見捨てられ不安を表す変数として未熟な防衛を用いた両モデルによる分析結果をみていく。いずれのモデルにおいても 2 時点目の未熟な防衛、見捨てられ不安は 1 時点目の同一変数によって強く規定されている (β_1, β_2)。各モデルの分析結果を見ていくと、交差遅延効果モデルでは、1 時点目の見捨てられ不安が 2 時点目の未熟な防衛に与えるラグ効果 (β_3) は有意な正の効果であった。同時効果モデルでも 2 時点目において見捨てられ不安が未熟な防衛に対して有意に正の影響を与えている (β_3) ことから、見捨てられ不安が未熟な防衛の先行要因として影響を与えることが示された。

つぎに、見捨てられ不安を表す変数として神経症的な防衛を用いた両モデルによる分析結果をみていく。ここでも、2 時点目の神経症的な防衛、見捨てられ不安は 1 時点目の同一変数によって強く規定されている (β_1, β_2)。交差遅延効果モデルでは、1 時点目の見捨てられ不安が 2 時点目の神経症的な防衛に与えるラグ効果 (β_3) と、1 時点目の神経症的な防衛が 2 時点目の見捨てられ不安に与えるラグ効果 (β_4) は有意な正の効果であった。同時効果モデルでも 2 時点目においてどちらも正の影響を与えてあっている (β_3, β_4) ことから、神経症的な防衛と見捨てられ不安は相互に影響を与えあうことが示された。

最後に、見捨てられ不安を表す変数として成熟した防衛を用いた両モデルによる分析結果をみていく。ここでも、2時点目の成熟した防衛、見捨てられ不安は1時点目の同一変数によって強く規定されている (β_1, β_2)。交差遅延効果モデルでは、1時点目の成熟した防衛が2時点目の見捨てられ不安に与えるラグ効果 (β_4) は有意な負の効果であり、同時効果モデルでも、2時点目において成熟した防衛が見捨てられ不安に対して有意に負の影響を与えている (β_4) ことから、成熟した防衛が見捨てられ不安の先行要因として影響を与えることが示された。

親密性の回避については、未熟な防衛とのみ因果関係があることが示され、交差遅延効果モデルでは、1時点目の親密性の回避が2時点目の未熟な防衛に与えるラグ効果 (β_3) は有意な正の効果であった。同時効果モデルでも2時点目において親密性の回避が未熟な防衛に対して有意に正の影響を与えている (β_3) ことから、親密性の回避が未熟な防衛の先行要因として影響を与えることが示された。

表 18 防衛と IWM の因果関係

(a) 交差遅延効果モデル結果

		β_1	β_2	β_3	β_4
見捨てられ不安	未熟な防衛	.73 ***	.51 ***	.21 ***	.04
	神経症的な防衛	.81 ***	.38 ***	.22 ***	-.12 *
	成熟した防衛	.76 ***	.56 ***	.04	-.10 *
親密性の回避	未熟な防衛	.80 ***	.62 ***	.14 *	.05
	神経症的な防衛	.79 ***	.49 ***	.02	-.05
	成熟した防衛	.80 ***	.56 ***	-.05	.04

※*** $p < .001$, * $p < .05$.

(b) 同時効果モデル結果

		β_1	β_2	β_3	β_4
見捨てられ不安	未熟な防衛	.72 ***	.50 ***	.29 ***	.07
	神経症的な防衛	.87 ***	.42 ***	.28 ***	-.31 †
	成熟した防衛	.76 ***	.56 ***	.05	-.17 *
親密性の回避	未熟な防衛	.79 ***	.61 ***	.17 *	.09
	神経症的な防衛	.79 ***	.49 ***	.02	-.11
	成熟した防衛	.80 ***	.57 ***	-.06	.07

※*** $p < .001$, * $p < .05$, † $p < .10$.

(7) 防衛とライフイベントを独立変数とした 2 要因分散分析

各尺度の平均値（未熟な防衛 $M=99.23$, 神経症的な防衛 $M=35.23$, 成熟した防衛 $M=39.48$, ネガティブライフイベント $M=8.66$, ポジティブライフイベント $M=7.89$) をカッティングポイントとし、一回目調査時の防衛の高低（未熟な防衛の高低、神経症的な防衛の高低、成熟した防衛の高低）と二回目調査時のライフイベントの高低（ネガティブライフイベントの高低、ポジティブライフイベントの高低）を独立変数、IWM の変化（見捨てられ不安の変化、親密性の回避の変化）を従属変数として、2 要因分散分析を行った（表 19）。

表 19 分散分析の結果

独立変数		従属変数		主効果	交互作用
防衛	ライフイベント	IWMの変化	防衛	ライフイベント	
未熟	ネガティブ	見捨てられ不安	<i>n.s.</i>	高群 > 低群 ($F(1,192)=5.55, p<.05$)	<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
神経症	ネガティブ		<i>n.s.</i>	高群 > 低群 ($F(1,192)=7.11, p<.01$)	<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
成熟	ネガティブ		<i>n.s.</i>	高群 > 低群 ($F(1,192)=6.71, p=.01$)	<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
未熟	ネガティブ	親密性の回避	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
神経症	ネガティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
成熟	ネガティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>

見捨てられ不安の変化については、独立変数が、未熟な防衛とネガティブライフイベントのとき、神経症的な防衛とネガティブライフイベントのとき、及び成熟した防衛とネガティブライフイベントのときに、それぞれライフイベントに主効果がみられ高群の方が有意に見捨てられ不安の変化が大きかった。

表 19 の結果の通り、防衛と IWM の変化との関係がみられなかったために、独立変数を上記の分析と同じにし、従属変数を変化の方向も加味した得点（この得点が 0 であるならば IWM が変化していないことを表し、正であるならば見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から高くなったことを表し、負であるならば、見捨てられ不安や親密性の回避が前回の調査時から低くなったことを表す。）にして、2 要因分散分析を行った（表 20）。

表 20 変化の方向も加味した IWM の変化についての分散分析の結果

独立変数		従属変数		主効果		交互作用
防衛	ライフイベント	IWM の変化	防衛	ライフイベント		
未熟	ネガティブ	見捨てられ不安	低群 > 高群 ($F(1,192)=3.56, p<.10$)	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
神経症	ネガティブ		低群 > 高群 ($F(1,192)=7.78, p<.01$)	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
	ポジティブ		低群 > 高群 ($F(1,192)=7.08, p<.01$)	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
成熟	ネガティブ		低群 > 高群 ($F(1,192)=2.87, p<.10$)	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
	ポジティブ		低群 > 高群 ($F(1,192)=3.02, p<.10$)	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
未熟	ネガティブ	親密性の回避	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>		あり(図)
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	低群 > 高群 ($F(1,192)=2.88, p<.10$)		<i>n.s.</i>
神経症	ネガティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>		あり(図)
成熟	ネガティブ		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>		<i>n.s.</i>
	ポジティブ		<i>n.s.</i>	低群 > 高群 ($F(1,192)=3.00, p<.10$)		<i>n.s.</i>

見捨てられ不安の変化については、独立変数が、未熟な防衛とネガティブライフイベントのとき、神経症的な防衛とネガティブライフイベントのとき、神経症的な防衛とポジティブライフイベントのとき、成熟した防衛とネガティブライフイベントのとき、及び成熟した防衛とポジティブライフイベントのときに、それぞれ防衛の主効果がみられ、防衛低群の方が有意に見捨てられ不安が高くなっていた。

親密性の回避については、独立変数が、未熟な防衛とポジティブライフイベントのとき、及び成熟した防衛とポジティブライフイベントのときに、それぞれライフイベントに主効果がみられ、低群の方が有意に親密性の回避が高くなっていた。また、独立変数が、未熟な防衛とネガティブライフイベントのとき、及び神経症的な防衛とポジティブライフイベントのときに交互作用がみられた（順に、 $(F(1,192) = 3.78, p < .10, F(1,192) = 2.72, p = .10)$ ）。

独立変数が、未熟な防衛とネガティブライフイベントのとき（図 13）、単純主効果に注目すると、ネガティブライフイベント低群において、未熟な防衛低群が、高群よりも有意に親密性の回避が低くなっており（ $F(1,192) = 3.00, p < .10$ ）、未熟な防衛高群においては、ネガティブライフイベントの高低に関係なく親密性の回避があまり変化していない（ $F(1,192) = 1.17, n.s.$ ）が、防衛低群はネガティブライフイベントが少ない方が親密性の回避が低くなっていた（ $F(1,192) = 2.78, p < .10$ ）。

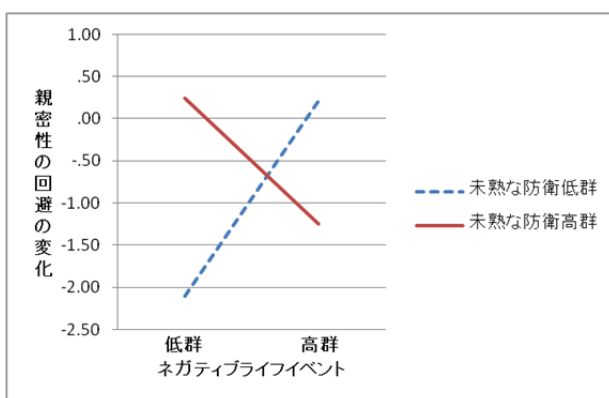


図 13 独立変数が未熟な防衛とネガティブライフイベントのときの親密性の回避の変化

独立変数が、神経症的な防衛とポジティブライフイベントのとき（図 14）、単純主効果に注目すると、神経症的な防衛低群においては、ポジティブライフイベントの高低に関係なく親密性の回避があまり変化していないが、神経症的な防衛高群はポジティブライフイベントを多く経験していた方が親密性の回避が低くなっていた（ $F(1,192) = 5.02, p < .05$ ）。

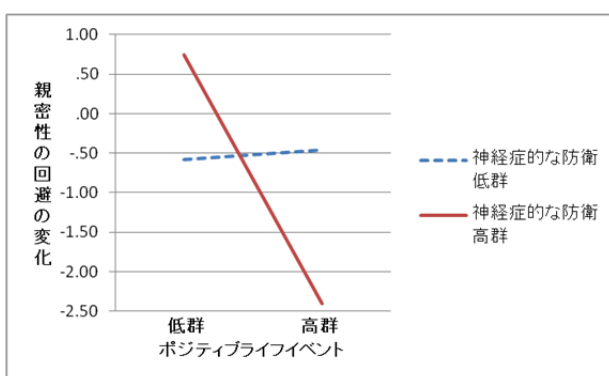


図 14 独立変数が神経症的な防衛とポジティブライフイベントのときの親密性の回避の変化

第4節 考察

(1) 本研究で用いた尺度について

愛着スタイル尺度について因子分析を行ったところ、先行研究の中尾・加藤（2004）と同じ因子構造が確認され、信頼性、再検査信頼性ともに、高い信頼性が認められた。性差について検討したところ、先行研究と同様、性差は認められなかった。

防衛スタイル尺度についても因子分析を行ったが、先行研究のような因子構造は認められなかった。しかし DSQ は標準化された尺度である（Andrews ら, 1993）ことと、先行研究の方がサンプル数が多いことを考慮して、先行研究に従い、未熟な防衛、神経症的な防衛、成熟した防衛の 3 つの下位尺度の得点を算出した。信頼性、再検査信頼性係数を算出したが、高い信頼性は認められなかった。性差について検討したところ、一部では性差があることが認められたが、二度の調査においては一貫した結果が得られず、Andrews ら（1993）の研究でも性差は確認されていないことから、本調査では扱わないこととした。しかし、岡田・桂田（2013）の研究では未熟な防衛の一部に関しては性差が認められていたことを考えると、一部の防衛に関しては性差が存在する可能性も否定できず、今後、より詳細に検討していく余地があると思われる。

(2) 愛着スタイルと防衛スタイルの関連について

調査一回目と調査二回目の結果から、見捨てられ不安が高い者は、未熟な防衛、神経症的な防衛が高く、親密性の回避が高い者は神経症的な防衛が低いことが明らかにされた。

蓮華 (2008) の研究や予備調査では、見捨てられ不安と成熟した防衛にも関連が認められていたが、本調査の結果ではその関連は認められなかった。反対に、蓮華 (2008) の研究や予備調査の結果からは認められていなかったが、本調査では親密性の回避と神経症的な防衛との間に負の相関関係が新たに認められた。親密性の回避は他者から離れるような行動を取るのに対して、神経症的な防衛は理想化など他者へと接近するような防衛であるので、負の相関関係が確認されたと考えられる。

IWM の型ごとに防衛の高さを比較した結果では、未熟な防衛、神経症的な防衛において差が示され、安定型がとらわれ型と恐れ型よりも未熟な防衛が低く、安定型と拒絶型が、とらわれ型と恐れ型よりも神経症的な防衛の値が低いという結果が、一回目調査時と二回目調査時の二度の調査において一貫して得られた。見捨てられ不安や親密性の回避の値が少ない、安定的な IWM を持つ者は、他の群に比べて表情をよりポジティブに認知する傾向 (金政, 2005) があり、さらに、不安を感じたり抑うつになる傾向が弱い (大井, 2004) ので、あまり心理的な脅威にさらされることなく、そのために防衛を行う必要がなく、防衛の値が低くなっているのではないかと思われる。現に、桂田・岡田 (2013) の研究でも安定型が未熟な防衛が低い傾向にあった。また、理論的には、とらわれ型、恐れ型に相当すると言われている回避型は、情動制御および情報処理の仕方が抑圧的である (Shaver & Mikulincer, 2002) ため、否認などを含む未熟な防衛が高いのではないかと考えられる。また、恐れ型に関しては、普段は攻撃性が抑圧されているが、自己の防衛が破綻の危機にさらされると激しい攻撃性を表出する (工藤, 2006) との報告もあり、攻撃性を表す項目を含む未熟な防衛が高いと思われる。不安定な愛着と関連することが示されているアレキシサイミア傾向 (田中, 2006) と防衛との関係について検討した津山・中村 (2011) の研究でもアレキシサイミア傾向が高いと、未熟な防衛が高くなることが示されており、本研究で得られた結果と一致していると考えられる。

安定型と同様に、神経症的な防衛において拒絶型も値が低いのは、拒絶型は見捨てられ不安が低く、親密性の回避が高いという特徴を持っており、自分自身に自信を持ち、自分が他者に接近する必要がないと感じているために、他者へ接近する防衛である神経症的な防衛を必要としないからであると考えられる。とらわれ型は親を理想化する傾向が強いこと (Kobak & Sccery, 1988) が報告されていたが、本調査でも理想化を含む神経症的な防衛が高かったことから、親だけでなく他者をも理想化する傾向が強いことが示唆された。

本研究では、成熟した防衛については、IWM のタイプの違いによって差は見られなかった。津山・中村 (2006) の研究でも、不安定な愛着と関連するアレキシサイミアの者とそうでない者を比較しても、成熟した防衛の差は確認されず、その理由として津山・中村 (2006) はアレキシサイミアの者は成熟した防衛のみでは十分に感情制御しきれないことを示唆し

ていた。不安定な IWM を持つ者はネガティブな感情を生起しやすく、成熟した防衛を行うものの、それのみではネガティブな感情を抑えきることができず、未熟な防衛などを用いるのではないであろうか。そこで、安定的な IWM を持つ者と成熟した防衛では差は見られず、未熟な防衛などに差が表れると考えられる。

(3) 愛着スタイルとライフイベントの関連について

愛着とライフイベントの関連を検討したところ、親密性の回避が低いと、ポジティブライフイベントが高いことが明らかにされた。さらに、IWMの4類型でライフイベントに差があるか検討したところ、差が示され、とらわれ型が拒絶型よりもネガティブライフイベントを多く経験していた。ポジティブライフイベントにおいては、安定型ととらわれ型が拒絶型よりも多く経験しており、さらに、とらわれ型は恐れ型よりも多く経験していた。パーソナリティの個人差から特定のライフイベントが経験されやすくなるようなこと (Roberts & Wood, 2006) は、選択効果と呼ばれ、日本でもその効果が確認されており (川本, 2013)、本研究でも選択効果が認められたと考えられる。とらわれ型は他者への接近を行うも、自己への不安が高いため、他者の一挙一動気になり、些細な他者の行動が不安をかりたてるのが予想される。そこで、本来ならば気にするようなことではないことも、ネガティブに捉えがちになり、結果としてネガティブライフイベントを経験したと感じやすくなるのが推測される。一方、拒絶型は自己への不安が低く、他者にも接近しないので、そもそも対人関係に関連するライフイベントを経験しにくい上に、何かネガティブなことが起こっても、その出来事を自分へ帰属することもなく、結果ネガティブな出来事ととして捉えにくいことが推測される。

ポジティブライフイベントについても、親密性の回避が低い安定型ととらわれ型が、親密性の回避の高い拒絶型よりも多く経験していたことは、親密性の回避が低いため他者と接する機会も多く、他者に対して肯定的であるため、出来事をポジティブに捉えやすいことが影響していると思われる。どちらも見捨てられ不安が高いとらわれ型と恐れ型を比較しても、親密性の回避が低いとらわれ型の方がポジティブライフイベントを多く経験していたことも、この考えを裏付けるものであると思われる。

(4) IWM の変化について

今回の調査では1か月という短い期間のIWMの変化に注目したが、予備調査や岡島(2010)の研究と同様、この短い期間でもIWMが変化することが示された。今回の調査は質問紙調査であり、調査参加者が質問紙に答える際に誤差が生じるため、ほんのわずかな数値の変化では実際にIWMが変化したとは考えにくい、かなり大きく変化していた者もいたことを考えると、実質的にIWMが変化した者もいると思われる。見捨てられ不安の変化と親密性の回避の変化を比較すると、見捨てられ不安の方が大きく変化していた。本調査の分析において、見捨てられ不安の方が本調査で取り上げた他の変数と関連が強かったことを考えると、見捨てられ不安は親密性の回避に比べて、多くのことから影響を受けやすく、変化しやすいものであると考えられる。

(5) IWM の変化と防衛との関連について

本研究では、先行研究の知見や、Bowlby (1980 黒田ら訳 1981)の理論に従い、対人関係についてのライフイベントを多く経験する者や、防衛的排除を行わない者ほどIWMが変化しやすいのかということ調査することを目的とした。

IWMと防衛との関連について検討するために行った相関分析からは、予備調査では、見捨てられ不安の変化の大きさは未熟な防衛、神経症的な防衛の強さとの間に正の関連性が示唆されたが、本調査ではIWMの変化と防衛との関連は確認されず、仮説は実証されなかった。しかし、どのようにIWMが変化したのかということと、防衛の関連を検討したところ、見捨てられ不安が低くなった者は見捨てられ不安の変化が大きいほど、未熟な防衛、神経症的な防衛を多く行っており、見捨てられ不安が高くなった者は、見捨てられ不安の変化が大きいほど、神経症的な防衛をあまり行わず、ネガティブライフイベントを多く経験していたことが明らかにされた。予備調査の結果では、見捨てられ不安が高くなった者は、神経症的な防衛を多く行っていたことが確認されていたが、データの分布を確認したところ、予備調査のデータは本調査のデータに収まり、なおかつ本調査のデータの方が、広範囲にデータが分布していたので、予備調査では得られなかったデータが、本調査で新たに得られたと考えられる。これらのことから考えられるのは、防衛を行うことで、IWMが変化するか否かについては影響を及ぼさないが、IWMがどのように変化するかについては影響を及ぼすことが示唆された。

Spiellberger (1966) は防衛の機能を、不安を低減させる働きと、認知的評定に影響を与え、脅威となる刺激を評定しないようにする機能の2つを挙げており、Bowlbyの理論は後者にあたるものであると考えられるが、本調査の結果からは、防衛の後者の機能ではなく、不安を低減させるという前者の機能が実証されたと考えられる。

しかし、見捨てられ不安、親密性の回避のそれぞれの平均値をカッティングポイントとし、それぞれのIWMの数値が平均よりも高い者を不安低群、低い者を安定群とし、変化した者の群と変化しなかった者の群の防衛とライフイベントを比較した結果から、見捨てら

不安が不安定群から変化しなかった群と変化した群を比較すると、不安低群のままであった群の方が不安低群から安定群に変化した群よりも未熟な防衛が高いことが示された。未熟な防衛は否認などを含み、防衛的排除の性質を最も捉えているものと思われるため、元々見捨てられ不安が高い者が、愛着類型が変化するほど（平均値の境界を超えるほど）見捨てられ不安が変化した場合には、防衛低い者ほど IWM が変化しやすいという仮説 1 が支持されるということが示された。

親密性の回避について比較すると、安定群のままであった群の方が、安定群から不安低群に変化した群よりも有意に神経症的な防衛が高かった。経症的な防衛は他者との間で行う防衛が多く含まれているので、この防衛を行うことで、他者へ接近し、親密性の回避が低いままであると考えられる。

(6) IWMの変化とライフイベントとの関連について

本調査では、ライフイベントを多く経験していると、IWMが変化すること、また、ネガティブライフイベントを経験すると、IWMがネガティブになること、反対に、ポジティブライフイベントを経験すると、IWMがポジティブになることを想定して、IWMの変化とライフイベントとの関連を検討した。

その結果、ネガティブライフイベントを多く経験するほど、見捨てられ不安の変化が大きいたことが示された。本調査の結果から、見捨てられ不安の変化において社会化効果が示されたと考えられ、仮説2は見捨てられ不安において支持されたと考えられる。

また、見捨てられ不安が高くなった者は、ネガティブライフイベントを多く経験しているという結果が得られた。さらに、愛着類型を想定し、平均値をカッティングポイントとし、見捨てられ不安について、安定群から変化しなかった群と変化した群を比較すると、安定群から不安定群に変化した群の方が安定群のままであった群よりもネガティブライフイベントを多く経験していた。この結果から、Watersら(2000)の見解と同様に、ネガティブなライフイベントを多く経験することはIWMにネガティブな影響を与えるという仮説3は見捨てられ不安において支持された。

また、親密性の回避については、安定群のままであった群の方が、安定群から不安定群に変化した群よりも有意にポジティブライフイベントを多く経験していた。ポジティブライフイベントを経験することと、親密性の回避を低く保ち続けるという関連が示された。

ライフイベントは見捨てられ不安、親密性の回避の両方に影響を与えると想定していたが、ネガティブライフイベントは見捨てられ不安のみにネガティブな変化を与えること、ポジティブライフイベントは親密性の回避を低く保ち続けることと関連していることが示された。

(7) 防衛とライフイベントが IWM の変化に及ぼす影響について

重回帰分析により、防衛とライフイベントが IWM の変化にどの程度影響を及ぼしているのかについて検討したところ、防衛は影響を与えていないことが示され、仮説 1 は支持されなかった。しかし、ライフイベントが IWM の変化に及ぼす影響については、ネガティブライフイベントが多いと見捨てられ不安の変化が多いことが示され、仮説 2 は見捨てられ不安において支持された。

ポジティブライフイベントの β は有意な負の値を取っていたが、理論的にポジティブライフイベントの経験が多いほど、IWM が変化しにくいということは考えにくい。また、相関分析ではポジティブライフイベントと見捨てられ不安の変化には有意な相関が確認されていなかったため、ポジティブライフイベントは抑制変数であると考えられる。ポジティブライフイベントとネガティブライフイベントには有意な正の相関がみられており、質問紙の回答を見てもネガティブライフイベントを多く経験していた者はポジティブライフイベントも多く経験していたという場合もあったので、どちらのライフイベントも経験したと認知しやすい者または、どちらのライフイベントも経験していないと認知しやすい者が一定数いると思われる。事実、愛着とライフイベントとの関連を検討したところ、とらわれ型が他に比べてネガティブライフイベントとポジティブライフイベントの両方をよく経験したと認知していた。そこで、ポジティブライフイベントをよく認知している者のネガティブライフイベントの経験は、ライフイベントの認知のしやすさに影響されているものであると思われる。ポジティブライフイベントを抑制変数であると考えれば、ライフイベントの認知のしやすさに関係なく、ネガティブライフイベントを経験している者が IWM を変化させやすいというように解釈でき、理論的説明も通る。そこで、ここではポジティブライフイベントを抑制変数とみなすこととする。

防衛とライフイベントが、IWM がどのように変化するかということに及ぼす影響について検討したところ、見捨てられ不安の変化にのみ、神経症的な防衛とネガティブライフイベントの影響が認められた。神経症的な防衛を行うほど、見捨てられ不安が低くなることが示され、これは他者と関わることで自分が見捨てられるかもしれないという不安を低減しようとする動きが反映されたものであると考えられる。また、ネガティブライフイベントが多いほど、見捨てられ不安が高まることも示され、ここでも社会化効果が認められ、仮説 3 は見捨てられ不安において支持された。

(8) 防衛と IWM の因果関係について

防衛と IWM の因果関係については、交差遅延効果モデルは初回調査時点の 2 変数が初回調査から追跡調査の間における両変数の変化に影響を及ぼすかどうかを検討するモデルであるが、2 回の調査期間が本来の因果関係が見出されるはずの時間よりも長すぎるとその影響が見出されない可能性がある (岡林, 2006) ので、交差遅延効果モデルに加えて、同時期における 2 要因の双方向の効果を検討する同時効果モデル (岡林, 2006) も併せて用いて検討した。

その結果、未熟な防衛と見捨てられ不安については、1 回目調査時の見捨てられ不安が 2 回目調査時の未熟な防衛に影響を及ぼしていることが示された。これは見捨てられ不安が高まると未熟な防衛を行うことを示しており、未熟な防衛が不安を抑えるために働いていると思われる。この因果関係は親密性の回避にも同じく見られ、親密性の回避が高まると未熟な防衛を行い、不安に耐えようとしているのだと思われる。

神経症的な防衛と見捨てられ不安については、1 回目調査時の見捨てられ不安が 2 回目調査時の神経症的な防衛に影響を及ぼしていることと、1 回目調査時の神経症的な防衛が 2 回目調査時の見捨てられ不安に影響を及ぼすことが示され、見捨てられ不安が高まると、神経症的な防衛を行い、神経症的な防衛を行うことで見捨てられ不安が低くなるというように相互に影響を与えあっていることが明らかにされた。自分が見捨てられるかもしれないという不安が高まったときに他者を頼ったり、他者に期待することで、自分の不安を抑えるという動きが働いているのだと考えられる。

成熟した防衛と見捨てられ不安については、1 回目調査時の成熟した防衛が 2 回目調査時の見捨てられ不安に影響を及ぼすことが示され、成熟した防衛を行うと見捨てられ不安が低くなることが明らかにされた。成熟した防衛が高度に発達した防衛であり、今回取り上げた 3 つの防衛の中で最も望ましいと考えられる防衛である。成熟した防衛は、未熟な防衛や神経症的な防衛とは異なり、見捨てられ不安に影響されることなく見捨てられ不安に影響を与えられる唯一の防衛であり、不安を予防的に低減させることができると思われる。蓮華 (2008) の研究では、青年期より成人期の方が成熟した防衛が高くなることが示されており、年代が上がるにつれ成熟した防衛を行うこと示唆されていた。年代が上がるにつれて、成熟した防衛を身につけていくなれば、年齢が上がるにつれて、成熟した防衛を行うことにより、予防的に見捨てられ不安を抑え、青年期よりも見捨てられ不安が低くなる可能性が考えられる。蓮華 (2008) の研究でも、青年期の見捨てられ不安の平均値と、成人期の見捨てられ不安の平均値とでは有意な差がみられ、成人期の見捨てられ不安の平均値の方が有意に低かった。これらのことより、蓮華 (2008) も指摘するように、年齢に伴ったり、経験を通したりして愛着スタイルが変容する可能性はあると考えられ、その変化の要因の 1 つとして防衛が関連することが考えられる。

(9) 防衛とライフイベントの交互作用について

防衛とライフイベントが組み合わせの効果を持ち、IWM の変化に関連しているかどうかを検討するために 2 要因の分散分析を行ったところ、防衛とライフイベントが相互に影響しあい IWM の変化に影響を与えているということは認められなかった。ライフイベントが単独で IWM の変化に影響を与えており、先に述べた結果と同じように、ネガティブライフイベントを多く経験している者ほど見捨てられ不安が変化していることが示され、仮説 2 は見捨てられ不安において支持された。防衛は IWM に影響を与えていることは示されず、仮説 1 は支持されなかった。親密性の回避の変化については防衛とライフイベントどちらの影響も認められなかった。

次に、ライフイベントが組み合わせの効果を持ち、IWM がどのように変化するのかということに関連しているかを検討したところ、見捨てられ不安については、防衛が単独で影響していることが示され、防衛が高い方が、見捨てられ不安が低くなっていることが示された。これは Spiellberger (1966) の述べる、防衛の不安を低減させる機能が反映された結果であると思われる。

親密性の回避の変化については、一部でポジティブライフイベントの影響が単独で認められ、ポジティブライフイベントを多く経験している方が親密性の回避が低いことが認められ、ここでも社会化効果が認められたと考えられる。

交互作用が認められたのは、独立変数が未熟な防衛とネガティブライフイベントで、従属変数が親密性の回避の変化のときと、独立変数が成熟した防衛とポジティブライフイベントで、従属変数が親密性の回避の変化のときであった。未熟な防衛とネガティブライフイベントが親密性の回避の変化に影響を与えているときは、未熟な防衛高群においては、ネガティブライフイベントの高低に関係なく親密性の回避があまり変化していないが、未熟な防衛低群はネガティブライフイベントが少ない方が親密性の回避が低くなっていた。このことは、未熟な防衛が高い者はあまりライフイベントに親密性の回避が左右されないが、未熟な防衛が低い者はライフイベントに親密性の回避が左右されやすいことを示唆しており、未熟な防衛の高さによって、同じネガティブライフイベントを経験しても、IWM の変化の仕方が異なると考えられる。

また、成熟した防衛とポジティブライフイベントが親密性の回避に影響を与えているとき、神経症的な防衛低群においては、ポジティブライフイベントの高低に関係なく親密性の回避があまり変化していないが、神経症的な防衛高群はポジティブライフイベントが多い方が親密性の回避が低くなっていた。このことは神経症的な防衛が高い者は理想化など他者を必要とするような防衛を多く行うことから、ポジティブライフイベントを経験することでますます他者に期待するために親密性の回避が低下すると考えられる。交互作用が認められた部分については、同じようにライフイベントを経験しても、IWM の変化の仕方が異なるために、防衛の持ち方は非常に重要であると思われる。

第5節 まとめ

本章では、IWM の変化と防衛やライフイベントとの関連について検討した。また、その前段階として IWM とライフイベントや防衛との関連についても検討した。IWM と防衛とはこれまで関連が示唆され続けていたが、実際に関連を検討した研究は少なかった。本研究の結果からは、見捨てられ不安は未熟な防衛と神経症的な防衛と正の関連性が、親密性の回避は神経症的な防衛と負の関連性が認められた。また、愛着類型ごとに分析した結果では、IWM のタイプによって、防衛の高さは異なることが示され、これまでの研究と通ずる結果が得られた。IWM とライフイベントとの関連を検討したところ、一部関連性が認められ、愛着類型によって、ライフイベントの経験に差があることが示された。この差は、実際にライフイベントを多く経験したというよりも、とらわれ型のように、ライフイベントを多く経験したという認知をしやすいタイプの者がいることを表す結果とも考えられる。IWM が知覚や認知に影響を及ぼすことは示唆され続けているが、本研究の結果から、IWM はライフイベントの認知についても影響を及ぼすことが考えられる。

本研究では Bowlby の理論に従い、IWM の変化と防衛との関連を検討したが、IWM が変化することと防衛との関係はほんの一部でしか認められなかった。しかし、IWM がどのように変化するのかについては、防衛との間で関連性が示され、未熟な防衛や神経症的な防衛を行うことで見捨てられ不安が低減することが明らかにされた。また、ネガティブライフイベントを経験すると、見捨てられ不安が高くなることも示され、防衛やライフイベントはどの方向に IWM が変化するのかということと関連することが明らかにされた。今後は単に IWM が変化することではなく、どのように IWM が変化するのかについて注目しながら防衛との関連性を検討することが必要となっていくであろう。

また、防衛とライフイベントの交互作用について検討したところ、一部で交互作用が認められ、IWM がどのように変化するのかについては、防衛やライフイベントが関わり合っ
て影響を与えていることが明らかにされた。このことは、同じライフイベントを経験しても、防衛の取り方によって、IWM がどう変化するのが異なることを示しており、今後はライフイベントのみならず、個人の特長についても同時に検討がなされていくことが望ましいと考えられる。

本研究では、縦断調査を行ったことにより、因果関係の推測を行うことができた。二度の縦断調査により、因果関係について検討したことは、本研究の大きな意義であると思われる。その結果、それぞれの防衛と IWM の因果関係は異なっており、未熟な防衛は前の IWM から影響を受け、神経症的な防衛は IWM と相互に影響しあい、成熟した防衛は後の IWM に影響を与えているという結果が示された。これまで一口に防衛と言われてきたが、どの防衛を用いるかによって IWM への影響の仕方は異なるので、どのような防衛を用いるかというのも IWM の変化にとって重要な要因であると思われる。

総括すると、防衛が低い者ほど IWM を変化させやすいという仮説 1 は愛着類型の変化を変化とみなした場合にのみ、見捨てられ不安高群において支持された。ライフイベントを

多く経験している者ほど IWM を変化させやすいという仮説 2 は、見捨てられ不安の変化においては支持され、さらにネガティブライフイベントを多く経験した者は、IWM をネガティブな方向に変化させるという仮説 3 も支持された。ポジティブライフイベントを多く経験した者は、IWM をポジティブな方向に変化させるという仮説 4 に関しては、ポジティブな変化をもたらすというよりも、親密性の回避を低く保ち続けることと関連していることが示された。

本研究では、新たに、防衛が不安定（見捨てられ不安や親密性の回避が高い）な IWM を抑える働きを持っているということが実証され、IWM への影響の仕方は防衛の取り方によって、異なることが示された。数多くの臨床研究で示唆されながらも、数量的にはあまり扱われてこなかった、IWM の変化と防衛との関連について実証できたことは意義のあることであると思われる。

本章の研究では、質問紙調査によるものであったので、個々人の特性を詳細に検討することや、実際にはどのようなライフイベントが特に影響を与えたのか、本人は変化についてどう認知しているのかなどについて詳しく聞くことはできなかった。そこで、今後は面接調査などを用い、個々人のエピソードや認知により迫っていく必要があると思われる。

第四章 面接調査

第1節 目的

第三章においては、大学生の集団を対象として、IWMの変化、防衛、及びライフイベントの関連を検討し、その一般的な傾向を捉えた。しかしながら、①必ずしもその傾向が個人個人の現実を捉えているとは限らないこと、②各々が体験したライフイベントについて、質問紙では大まかにしか尋ねることができず、その詳細についてはわかっていないこと、③1か月という限定された期間のみを扱っており、過去にどのような変遷があつてIWMが変化している（またはしていない）のかがわからないことが問題点として挙げられる。

そこで、本章においては、面接調査に協力してくれた4名の体験に即してIWMの変化を追い、変化したときの出来事などの詳細を捉えることを目的とする。また、前章で記述した一般的な傾向が個人個人の体験にもみられるのかを検討することも目的とする。

第三章の質問紙調査においては、2時点のIWMを測定することにより、その変化を捉えていたが、面接調査ではそれより過去の、IWMの変化の変遷を追うことも目的としているので、特定のある時期のみについて、回想法を用いて質問紙でIWMを測定することは妥当でないと考えられる。そこで、IWMの変遷を追うために、ライフラインや関係性ラインに見られるようなラインを用いることとする。

ライフラインは、横軸は時間の流れを、縦軸は幸福感を表す指標とし、その指標を基に、ライフイベントの節目を意識しながら、過去から現在までの感情の変化を表すものとなっており、自分の感情を中心とした比較的容易に書ける自分史である（河村, 2000）。

このライフラインを参考に、泉谷（2012）は関係性ラインを考案し、面接調査において自分と相手の関係の変遷を可視化するために導入している。なお、関係性ラインでは、横軸は時間の流れを、縦軸は相手と出会った時の親しさを表す指標としており、始点は相手と出会った時の親しきで、0から始まるよう教示している。

本研究でラインを描かせる目的は、まず第一に、個人内のIWMの変遷を知るためである。河村（2000）では、最初に節目となる時期を意識して描かせ、その時期ごとに自身の幸福感を考えていくよう教示していたが、それを行うことによって、大きな節目がある時期以外のIWMの変化が意識されなくなる恐れがある。そこで、本研究では、あえて節目となる時期を意識させる教示を行わず、調査協力者に自由にラインを描かせることとする。また、泉谷（2012）では、始点は0から始まるよう教示しているが、本研究では個人内のIWMの変化の大きい時期などを理解する一助としてラインを用いているので、必ずしも始点が0である必要はない。さらに、乳児期の頃のとときの感情などは記憶になかったり、意識されていなかったりする可能性も高い。泉谷（2012）の研究でも、調査対象者が変化を考えやすいようにするために、基準の設定をしたが、そのことがかえって調査対象者の自由度を狭め、調査対象者を窮屈にさせてしまったことが言及されている。そのため、本研究では、あえて、始点の教示は行わず調査協力者の裁量に任せてラインを描いてもらうこととする。しかし、基準を無くすことで、調査対象者がどういう意図でそのラインを描いたのかが不明瞭になる恐れがあるので、ラインを描いてもらったあと、どういう意図を持ってそのよ

うなラインを描いたかを尋ねることで理解の一助とする。

ラインを描いてもらうことにより、調査対象者自身が過去から現在の IWM の変遷を自覚しやすくなるとともに、調査者も移り変わりを可視化でき、どのような変遷があったのかについて共通理解しやすくなると思われる。また、ラインの浮き沈みを見ることで、過去の IWM の変化の大きさを押さえながら、その当時の話を聞けるので、調査の中で重要なエピソードを押さえやすいことが期待できる。

本研究では、1 か月間で大きく IWM が変化した者と、あまり変化しなかった者とを比較し、その差異について見出すことも目的の 1 つである。しかし、二回の質問紙調査を行った間の 1 か月間と、それよりも前の過去の期間の IWM の変化やその時の出来事を尋ねても、そこで言及されるエピソードはおそらく、個々人で全く違うものであろうし、比較することはできない。そこで、本研究では、場面想定法を用い、同じ場面に対して各々がどう反応するかを調査する。用いる場面は、人によってポジティブにもネガティブにもその場면을解釈できるような場面が適切であると考えたため、対人葛藤場面を選択することとした。

対人葛藤場面とは自分の思い通りにならない場面や、私達自身にネガティブな結果をもたらす出来事に出会ったときのような場面のことであり、このような場面では、出来事を偶然によって生じたものとみなしたり、他の外的な原因により生じたというように様々な解釈や判断ができる（相澤, 2010）。IWM は認知にも影響することが示唆されている（戸田, 1989; 金政, 2005）ので、IWM が異なると、出来事に対する知覚の仕方やそれに対する自分の感情にも違いが表れると思う。また、不安が喚起された場合にはそれに対する防衛の取り方が見られることが予想されるため、同じような出来事で個々人がどういう反応をするのかが比較できると期待できる。さらに、IWM を変化させやすい者と、固持しやすい者では、その出来事をどう変化のプロセスに加えるのかということについても検討できることを期待する。

本研究では、まず質問紙調査（第三章）を行った期間での IWM の変化を探るとともに、過去の IWM の変化についても探り、IWM の変化についての詳細について情報を収集するとともに、第三章で得られた結果が、個々人の体験に即しているのかを検討していく。また、IWM を変化させる者と IWM を固持した者ではどういう違いがあるのかについて、場面想定法を用いながら迫っていく。

第2節 方法

(1) 調査対象

大学生4名を対象とした。

(2) 調査までの手続き

質問紙調査(第三章)の対象者196名のうち、調査協力を承諾してくれた学生の中から、IWMの変化が著しい者と、IWMの変化がほとんどない者を2名ずつ、計4名を選出し、対象者とした。調査対象者とは、調査者が直接メールや電話をし、面接調査の日程を決めた。

(3) 調査時期

2013年12月に行った。最初の調査対象者との面接調査から4日以内に、4人全ての面接を行った。

(4) 調査内容と手続き

面接場所は人の出入りがないよう、個室で行った。調査に先立って、調査の内容をボイスレコーダーで録音する旨、話したくないことは話す必要がない旨、個人が特定されないよう修正を加えた上で論文として公表する旨、データの扱いには最大限配慮する旨を説明し、了承を得た後、承諾書(資料1)に署名をもらった。その後、一般他者愛着スタイル尺度の質問紙へ回答をしてもらい、以下の順序で教示を行い(アラビア数字部分とローマ数字部分を分けて表記している部分については、アラビア数字部分はIWMが変化した群への教示、ローマ数字部分は、IWMが変化していない群への教示を表す。)、半構造化面接を行った。面接調査時間はそれぞれ1時間から1時間半程度であった。

①「実は、今の質問は10月中旬と11月中旬に行ったアンケート調査の質問と同じものです。この質問は対人関係観について尋ねているものですが、10月、11月、今日、と3回この質問に答えてみて、何かご自身で気づいたことや、思ったことはありますか。」
「アンケートの結果は変わるものであり、必ずしも正確にあなたの考えを反映しているとはかぎらないのですが(調査結果用紙を見せながら)」

②「10月__日と11月__日の調査の結果がこちらになります。この結果をみて気づいたことや、思ったことはありますか。」

③「10月と11月の間に数値が変わっていますが、この変化について何か思い当たることはありますか。」

「(ライフイベント尺度を見せて)このようなことをこの一ヶ月の間に経験したようですが、何か関係ありそうなものはありますか。」

iii「10月と11月の間に数値がほとんど変わっていませんが、このことについて何か思い当たることはありますか。」

「(ライフイベント尺度を見せて)このようなことをこの一ヶ月の間に経験したようです。」

が、これらの経験は対人関係についての考え方の変化にあまり関係なさそうですか。」
「この横軸が、あなたの人生の時間的な流れを示す線であるとともに、その時期その時期のあなたの人との関係について不安に思う気持ちを示す、座標軸になります。これがあなたの誕生時点です。右端が現在のあなたの時点です。あなたの、人との関係について不安に思う傾向がどのように変わっていったのでしょうか。それを 1 本の線で表してみてください。時間の長さは、均等な割合になるように記す必要はありません。縦軸の上に行くほど不安に思う気持ちが強い、下に行くほど不安に思う気持ちが弱いとお考えください。」

「(ラインを描き終わったら) このように描いたことについて簡単に説明をお願いします。」

④「ここが大きく変わっていますが、そのときにどういうことが起こりましたか。」

「では、次はこの図中に、人との関わりを避けようとする傾向の強さの方も描いてください。時間軸はさっき描いた線となるべく同じように描いていってください。」

「(ラインを描き終わったら) このように描いたことについて簡単に説明をお願いします。」

④「ここが大きく変わっていますが、そのときにどういうことが起こりましたか。」

⑤「対人関係についての考え方は頻繁に変わる方ですか。」

v 「対人関係についての考え方はあまり変わらない方ですか。」

⑥「今後、どういうことが起こったら、対人関係についての考えは変わりそうですか。」

⑦「ここからはある場面を想定してお話してもらいたいのですが、あなたは授業でプレゼンテーションをしています。その時に一人の熱心な学生に強く批判されました。」

「あなたはそのときにどう感じますか。」

「相手はどうしてそうしたと思いますか。」

「その後どのように行動しますか。」

⑧「次の場面について想像してください。あなたは他学部の授業を受けることになりました。知り合いは誰もいません。他の受講生はみな顔見知りのようです。先生から、非常に骨の折れるレポート課題が出されグループを組んで取り組むように指示されました。他の受講生はレポートの分担を始めましたが、誰もあなたを誘ってくれません。」

「他の受講生はあなたのことをどう思っていると感じますか。」

「あなたはそのときにどう感じますか。」

「その後どのように行動しますか。」

⑧「ここまで話してみていかがでしたか。何か気づいたことや思ったことはありますか。」

第4節 考察

(1) 縦断的に捉えた1カ月間のIWMの変化について

まず、本調査で縦断的に捉えた1カ月間のIWMに注目して考察を進めるため、CとDに注目することとする。

CはIWMの数値がよく変わっている方の者であったが、本人にその自覚はなく、結果を見せると、質問紙の回答への時間の掛け方とかが影響しているかもしれないと答えた。Cの質問紙への回答を確認してみると、確かに回答の仕方が多様であり、極端に同じ数字のみを選んでいるときもある。第三章で行った質問紙調査では集団で実施したものであり、そのときの受験者の体調や構えまで察知し、それを統制することはできず(山崎・内田, 2005)、そのために回答者の回答の仕方にデータが大きく影響されている恐れがある。Cの言動から、回答にはそのことが反映されていると考えられる。

DはIWMの数値がよく変わっていた理由について、友達と四六時中いたことや、1人の時間が増えたことなど、その時その時の出来事が関連していることを話した。このような変化は状況に合わせて変わる程度のものであって、実質的にIWMが変化したと言うよりはライフイベントに即して一時的にIWMが変化したものと思われる。事実、面接調査時に測定したIWMの数値は、一回目測定時の数値に近付いており、一時的にIWMが変化したものであると考えられる。Dは、一回目調査時は未熟な防衛が低かったが、二回目調査時の見捨てられ不安の高まりと同時に、未熟な防衛もかなり高くなっている。二回目調査時に友だちとあまり遊んでいなかったために不安が高まったと話しており、その不安を抑えるために未熟な防衛が高まったものであると考えられる。第三章において、未熟な防衛は不安の高まりによって、より多く行われることが示唆されたが、Dのエピソードはそれを支持するものであると思われる。本調査では、IWMが変化した者として2名を取り上げたが、本人たちの自省報告からは実質的にIWMは変化したとは言いがたいと判断する方が妥当であると思われる。しかし、IWMや防衛が無意識下で影響していることを考えると、実質的には変化していても本人たちがそれを意識できず、エピソードには表れにくいということはあるかもしれない。

AとBはほとんどIWMが変化しておらず、変化しなかったことについて尋ねたのだが、結果の数値が少し変わっていることに注目し、その変化について話した。

Aは新しい人間関係を構築する際に馴染めず、そのことは自分自身が嫌われているのではないかと不安を抱えていることが関係しているのではないかと言及した。このことは見捨てられ不安も親密性の回避も高く、親密さを求めるが拒絶されることが怖いので、結果的に親しい関係を避けてしまうというおそれ型の特徴(安藤・遠藤, 2005)を如実に表していると考えられる。Aのように、回避的なIWMを持つ者は、相手の好意や関心を低く評価し、相手の反応に関わらず相互交渉を避ける(戸田, 1989)ので、それが災いして、結果として信頼できる人間関係が築きにくく、おそれ型の特徴を固持していつているように思われる。

Bは新しい環境に入ったので、不安が高まったが、環境に慣れてきたことで、わずかに不

安が低減したことを話した。新しい環境では一時的に不安が高まるが、環境に順応していくことで、不安が元に戻っていくことが伺えた。状態不安が高いことと、IWM が不安定（見捨てられ不安も親密性の回避も高い）なこととは正の関連性が示されており（大井, 2004）、そのことが B のエピソードにも表れていると思われる。

(2) 過去の IWM の変化について

A は中学生時代に、一人の異性に陰口を言われたことで、見捨てられ不安が高まったこと、その後はあまり変化がないことを話した。陰口を言った人物はただのクラスメートであり、愛着対象と呼べる人物ではなかったが、A はその出来事の影響が今でも残っているほどであることを話した。その時には、何がだめなのだろうかという気持ちと、お前に言われたくないという相手への敵意があったことが伺えた。不安の高まりを抑制するために相手への敵意という未熟な防衛が働いたと考えられる。

B は新しい環境に入ると不安が高まり、体調にもそれが表れること、環境に慣れたり、その環境で親しい人ができたりすると不安が低減することを話した。不安があると体調に表れることは、見捨てられ不安の高さと、不安からくる未熟な防衛の高さを如実に表していると思われる。また、人を頼ることによって不安を低減しようとする神経症的な防衛の高さも伺えた。B は不安そのものがなくなるわけではないのだが、不安を少しでも軽減するためにと、不安を感じる度に対症的に防衛を用い、不安を低減しようとしていることが伺えた。しかし、B は孤立してしまうことを極度に恐れており、周囲との関係が途切れてしまうことに強い不安を抱えていた。神経症的な防衛を行うことは、人に頼る部分が大いいため、頼る対象を失うかもしれないという不安と表裏一体であるためと考えられる。

C は、恩師が亡くなったときと恋人に振られたときに不安が高まったことを話した。恩師がきっかけで教師になろうと思っていたが、恩師の死によって、それも辞めてしまおうかとも思ったことを話していたことや、恋人に振られたとき新しい恋人を探そうとしたことから、人に期待することで不安を低減しようとする C の神経症的な防衛を用いた側面が伺えた。しかし、そう思いつつも C は恩師とのつながりであった部活に励んだり、悩んでもいても仕方ないと気持ちを切り替えたと話しており、昇華したり抑制したりと成熟した防衛を用いていたことも伺える。また、人との関わりを避ける傾向については、大学入学時のように知らない土地に来て、全く知らないというところとは感じなかったと話しており、C のラインは基本的に見捨てられ不安も親密性の回避も低い安定型のために、基本的に物事をポジティブに捉えており、不安にさらされる可能性が少ないのかもしれない。それを裏付けるように、C の見捨てられ不安が高くなった時期についての話では、恩師の死や、恋人との別れなど、決定的に愛着対象を喪失したようなエピソードのみが語られていた。

D は中学時代に所属していた部内での部活に対する熱意の違いや、高校時代に受験へのモチベーションの違いから、不安が高まったことや、高校時代に信頼できる先生に出会えたことで不安が低減したことを話した。しかし、話を聞くと、高校の時のことについては、友達に見捨てられるかどうかを心配するような不安というよりは、友だちとの上手いかなさについて言及しており、見捨てられ不安というよりは、自分と友達の距離をどう保つかという親密性の回避についてと言った方が適切であるかもしれない。事実、D の描いた図を見ると、高校時代からは見捨てられ不安を表す線と親密性の回避を表す線がほぼ同じような動きを示している。教示をわかりやすくするために、見捨てられ不安を人との関係

について不安に思う傾向と置き換えて説明したが、このことで見捨てられ不安の意味合いがわかりにくくなったと思われる。D は中学時代と高校時代では人との関わり方が変わったことに言及し、なぜそうなったかについて、今までの自身の行動に疑問を持ったからであると話していた。D はこういった気づきや意識の変化が対人関係観の変化に重要だと話しており、この柔軟性や、積極的に変化をしていこうとする姿勢が変化につながったと考えられる。D は、これまでの考えのみにとらわれず、柔軟に自己を見つめ直していくことができると考えられ、D が対人関係観をよく変動させているのも、こういったことが関係していると思われる。これまでの認知的傾向に縛られず、否認をしないという意味では未熟な防衛をあまり行わないために IWM を変化させやすいとも考えられるであろう。

4 人のエピソードから、IWM が変化したきっかけは、愛着対象喪失のようなものから、日常で起こり得る些細な出来事まで様々であった。このことから、同じようなライフイベントを体験しても、個々人の IWM の変化のさせ方は違うと思われる。本研究の第三章で得られた結果のように、IWM の変化にはライフイベントだけでなく、個人の特性も関わると考えられる。

過去の IWM の変化についてはエピソードとして顕著に確認されたものの、縦断的に捉えた 1 カ月間の IWM の変化については、変化があまり顕著に確認されなかった。しかし、過去の個々のエピソードに目を向けると陰口を言われた等、日常でも体験しそうな出来事が大きく IWM を変化させているケースもあった。また、過去の出来事を想起してもらったところ、今思い返してみるとあの出来事が関係しているということや、話しているうちにそう思ってきたなど、その時には気づかないが、後になって考えてみると変化に気づくという場合がみられた。このことから、出来事について後にどう意味づけているかということも IWM の変化の重要な要素であるかもしれない。AAI（問題と目的参照）で捉える IWM は過去の表象にも注目したものであるが、質問紙調査で捉える IWM は過去の表象については問題にしていない。質問紙調査で捉える IWM も過去の表象と関連しているが、過去への意味づけなしには実質的な変化を本人が意識しにくいものであるのかもしれない。質問紙調査では誤差やどのようなつもりで本人が評定したのかを感知できないために、IWM の変化の研究では面接調査も併せて行うことが望ましいと思われる。

(3) ラインを用いた効果について

本研究では過去の IWM の変化を探る上で、面接参加者にライフラインを用いて IWM の変化を可視化してもらうとともに、面接参加者と筆者の対話のプロセスを経る対話型ライフライン (明石・豊嶋, 2009) のような手法を用いた。

ラインに描いてもらうことにより、面接参加者がどの程度変化していると感じているのかを筆者が可視化でき、変化に関連する出来事を聞くきっかけになったと思われ、IWM の変化について探る研究において、ラインを用いることは有用であると思われる。

また、対話型ライフラインの方式を用いたことによって面接参加者も、自分の中の転機を確認できたなど、人生の再確認や軌跡の確認作業 (明石・豊嶋, 2010) が行われたと思われる。対話をしながら、ここはこうだったかもしれないとラインに修正を加える者もあり、明石・豊嶋 (2010) が指摘するように、対話を通して自分への気づきがあり、過去の意味合いが変化していったことが伺える。また、D が話すことで思い出すことがあったと言及しているように、対話の中でストーリーが引き出され、洗練されていく (明石・豊嶋, 2010) という効果も得られたと考えられる。今回は IWM の特性上、見捨てられ不安や親密性の回避が高まった時のことについても詳細に聞き、かなり否定的な感情にも触れたが、最初は話しにくそうにしていた否定的な感情も、話が進むにつれ話していくようになっていったのが非常に印象的であった。このことは明石・豊嶋 (2010) が指摘するように、語りと対話の治療性を示しているのかもしれない。IWM についての対話型ライフラインの方式を用いたことで、治療性が得られるならば、それは見捨てられ不安も親密性の回避も高い不安定な過去の IWM を再編することができると思われ、非常に有用なものであると考えられる。過去に戻って、人生をやり直すことは不可能だが、対話型ライフラインの方式を用いて人生の物語を新しく再編するということは可能であり、それは IWM 研究にとって新たな介入の 1 つとなるのかもしれない。

(4) 場面想定法による対人葛藤場面での反応について

対人挑発場面であるプレゼン場面では、Aは相手の気持ちをネガティブに捉え、そのときの自分の気持ちについてはそれに反発する様な気持ちであることを話した。見捨てられ不安も親密性の回避も高いAは他者についてネガティブに受け取りがちになり、それに対して攻撃性を示す未熟な防衛をとることが示唆された。このことは、見捨てられ不安も親密性の回避も高い者は不安を感じとりやすく、さらに不安が増大するので、未熟な防衛を行うことによって、不安を低減しようとしているものと思われる。相沢(2010)は否定的な体験が他者の意図により生じたと判断した場合は、その出来事をより一層否定的な出来事として解釈し、ネガティブな情動的反応をもたらし、さらに対人関係に悪影響を与えるような行動に向かい、結果として対人関係を葛藤的なものにしてしまうと述べていたが、Aにはこの兆候が表れていたと思われる。

Bは相手の言動については非敵意判断を、自分の気持ちには傷つきを感じていた。また、授業終了後には自責感を感じると言っていた。

Cは相手の言動については非敵意判断をし、自分の気持ちについては相手がプレゼンを聞いていたという意味で嬉しいと言っていた。対人挑発場面においても嬉しいと感じたのは4人の中でCだけであった。Cは見捨てられ不安も親密性の回避も低い安定型であるために、相手の認識もポジティブであることが影響していると考えられる。

Dも授業後は少しへこむかもしれないと言っていたが、批判されたことについて落ち込む事はないし、自分のためにもなると前向きに捉えていた。

4人を比較すると、CとDの2人は対人挑発場面であるプレゼン場面を比較的前向きに捉えていた。AとBは反発を表したり、不安を表す様子が比較的強く、どちらかと言うと後向きな答えであったように思われる。これには、個人のIWMが関係していると思われる。見捨てられ不安や親密性の回避が高い者はネガティブな情動をよく生起させる(上條・岡島・桂田, 2013)ため、見捨てられ不安や親密性の回避が高いAとBはネガティブな回答をしたものと考えられる。しかし、AとBは反発や不安を抱きながらも、その場ではなるべく理性的に対応するよう努めると答えていた。AとBは共通して、新しい場面などでは、自分がネガティブな気持ちを持っていることを見せないようにして、人と関わることに言及しており、人とうまく付き合っていくために、自身の気持ちとは裏腹な対応も方略的に学んでいると思われる。人との付き合いの中でうまくやっていくために、こういうことは欠かせないことであるが、あまりにも自分の本心を押し殺してしまうことで、精神的健康が損なわれることも当然ありうる。そこで、不安が高い者はますます精神的健康を損なっていくことが予想される。これまでの研究から、不安定な(見捨てられ不安や親密性の回避が低い)IWMを持つ者は抑うつ傾向と正の関連性が示されているが(大井, 2004)、こういったこともその一因となっているのではないかと考えられる。

対人疎外場面であるグループ場面では、AとCは相手に相澤(2010)の研究で見られたような、怒りや傷つきを特に示さず、その後も問題解決的に動くと言っていた。Bは自身の

気持ちには傷つきを感じはするが、同じく問題解決的に動くと言っていた。D は傷つきを感じつつも、グループに入らなくてはと思い近くの子に話しかけるが、相手がグループに誘ってくれるのを待ち、自分からはグループに入れてとは言えないと話した。

久木山（2000）の分類に従うと、A と B と C の意見は自分から適切に主張して問題を解決しようとする主張的行動に分類され、D の他者に気付かれるように動くが、問題解決を他者に依存するという意見は依存的行動に分類される。D はやや消極的ながらも、4 人とも問題解決的に動くことを話していた。しかし、A は普段は自分からは動かないが、授業では義務感があるから自分から行動すると話しており、今回全員が問題解決的に行動したのは、授業内のことであるからということも影響しているかもしれない。また、2 つの対人葛藤場面はいずれも重要でないと認識している人物を相手にしていたために、ある程度理性的に行動出来たということもあるかもしれない。今回の面接調査では、面接参加者の負担を考え、重要でないと認識している人物を想定して回答してもらう場面を選んだが、親しい人との間の関係の方が、情動を喚起しやすく、それに伴う防衛の仕方も捉えやすかったかもしれない。過去の対人関係観の変化では 4 人とも自分と関係する身近な人間関係についての話を語っていることからそれは伺える。

対人疎外場面であるプレゼン場面と対人挑発場面であるグループ場面の 2 つの場面について比較すると、対人挑発場面の方が個々の反応が分かっていた。相沢（2010）は、対人挑発場面は何らかの実地的な損害が発生する場面であるが、対人疎外場面は実地的な損害をもたらすのではなく、あくまで情緒的な負担を引き起こす可能性のある場面にすぎないために、場面がもたらす衝撃度が緩和されるものと思われることに言及しており、本研究で対人疎外場面において回答にあまり差異が見られなかったのもそのことが関連しているかもしれない。今回の面接調査からは、否定的な体験を通して、ネガティブな情動が生まれても、それは他の人にまで及ぶと言った言及は見られず、後の IWM に影響を与えるほどではなかった出来事であったと思われる。また、それには授業場面というある程度理性的な対応が望まれる場面であったことや、相手が重要でないと認識している人物であったことも影響していると考えられる。しかし、対人挑発場面であるプレゼン場面ではその後の対応に防衛の取り方が表れていたため、その点に関しては対人葛藤場面における場面想定法は有益であったと思われる。

第5節 まとめ

本章では、質問紙調査を行った期間での IWM の変化を探るとともに、過去の IWM の変化についても探り、IWM の変化の詳細について対話型ライフラインの方式や、場面想定法を用いながら、面接による情報収集を行った。また、第三章で得られた結果が、個々人の体験に即しているのかを検討していった。

その結果、ネガティブなライフイベントに直面することや信頼できる人物の存在によって IWM が変化することが示唆された。また、新しい環境に入ったときや、その時々の人間関係によって一時的に IWM が変化することも示唆された。不安が喚起されたときには何らかの防衛が働くことも認められ、第三章の結果から得られた知見のように、防衛は不安の抑制や低減のはたらきをするものであると考えられる。IWM の変化に関わったライフイベントについては日常起こり得る些細なことから、親しい人の死など様々なことが挙げられ、単にライフイベントだけではなく、その事態をどの程度受け止めるのかなどに関係する個人の特性も関係すると思われる。第三章の結果では IWM の変化の仕方には交互作用が見られ、ライフイベントと防衛が相互に影響しあい IWM の変化に影響を及ぼすことが示されたが、本章の結果からもそれは支持された。

今回の調査では、対話型ライフラインの方式を用い、IWM をラインで表してもらいながら面接を行った。ラインで表してもらったことにより、IWM の変動が可視化でき、理解を助けるものとなった。対話だけではどの程度 IWM が変動したと捉えているのか、面接参加者と調査者の間で共通理解がされにくいために、ラインを用いて共通理解を促すことは IWM 変化の研究の中でも今後有用なものとなると思われる。また、本研究では意図していなかったが、面接参加者には語ることによって、IWM 変化の軌跡の確認や、新たな気づきや意味づけがなされるという効果があった。否定的な感情の受容なども見られていたために、IWM を表すラインについて語ることは、IWM の統合や再編を行う上でも役に立つと思われ、新たな介入の 1 つの方法として役立つかもしれない。

また、今回の調査では面接参加者が同じ事態に対してそれぞれがどう認知し、どう反応するのかを場面想定法を用いることで比較しようとした。対人挑発場面では、一部の者でネガティブな認知の喚起や、それに伴い防衛をとることが認められたが、対人疎外場面ではあまり差異が見られなかった。今回の面接参加者であまり差異がみられなかったのは授業場面を選んだことや、重要でないと認識している人物を相手にする場面であったことも一因として考えられる。より情動喚起を伴うと思われるある程度のある関係がある者や、親しい人物について想定させることで、よりはっきりとした差異が見られるかもしれない。

面接調査においても、第三章で確認された IWM の変化と防衛の関係について確認され、第三章のデータがより現実に即したものとなったと思われる。また、面接時の発言によりその人が質問紙で答えた内容が修正されたり、質問紙に確認された IWM の変化が当人の実感として一時的な変化であるのかどうかに関してなど、質問紙調査のみでは知り得ない部分についても補うことができたので、意義のあるものであったと思われる。IWM の変化を

追うに当たっては、それが本人にとってはどの程度の変化であり、どう捉えているのかということも重要であると思われ、質問紙調査と面接調査を併用していくことで、より詳細に迫っていくことができると思われる。今回の調査においては、現在の変化よりも過去の変化の方に重きが置かれて話されており、IWMの変化を意識するにはもしかしたら、自身が出来事などをどう意味づけているかということが関連するかもしれないことが示唆された。そのため、質問紙調査でデータを収集していくとともに、その後時間を置いてから変化したことについてどう意味づけているのかに注目していくとまた新たな知見が得られると思われる。

第五章 総合考察

第1節 IWMの変化と防衛及びライフイベントとの関連について

第2章及び第3章では、4つの仮説を立て、IWMの変化と防衛及びライフイベントとの関連について質問紙によって、数量的に研究を行った。

防衛が低い者ほどIWMを変化させやすいという仮説1に関しては、元々見捨てられ不安が高い者が、愛着類型が変化するほど（平均値の境界を超えるほど）見捨てられ不安が低くなった場合には、支持された。しかし、変化を類型ではなく、IWMの尺度得点の変化として捉えた場合にはこの仮説は支持されず、見捨てられ不安において一部のみ仮説1が支持される結果となった。

本研究では、IWMが変化することのみならず、どのように変化するのかについても注目した。その結果、未熟な防衛や神経症的な防衛を行うことで、見捨てられ不安が低くなるという結果が得られた。このことは、防衛は不安を低減させる働きがあるという従来の知見と一致する結果である。

さらに、IWMと防衛にどのような因果関係があるかを検討したところ、未熟な防衛は見捨てられ不安や親密性の回避から影響を受けていることが示され、IWMがネガティブになると、その不安から自身を守るために働くことが示唆された。神経症的な防衛は見捨てられ不安と相互に影響を与えあっており、不安から自身を守るための働きと、不安自体を抑制する働きもあることが示唆された。成熟した防衛は、見捨てられ不安に影響されることなく、見捨てられ不安を抑制する働きがあることが示唆された。

ライフイベントを多く経験している者ほどIWMを変化させやすいという仮説2については、ネガティブライフイベントにおいてのみ支持された。また、見捨てられ不安が高くなった者はネガティブライフイベントを多く経験しており、仮説3は見捨てられ不安においてのみ支持された。ポジティブライフイベントに関しては、親密性の回避が、安定（平均値より低い）群のままであった群の方が、安定群から不安低群に変化した群よりも有意にポジティブライフイベントを多く経験しており、仮説4であるポジティブライフイベントは、IWMをポジティブな方向に変化させるというよりも、親密性の回避を低く保ち続けることと関連があることが示された。

また、本研究では、親密性の回避がどのように変化するのかについては、一部に防衛とライフイベントが組み合わせの効果が見られたために、防衛とライフイベントが独立的に影響を与えるだけでなく、防衛とライフイベントの組み合わせの効果によって影響を与えることが示された。

以上を概括すると、愛着類型で捉えたときのみ仮説1は一部支持され、仮説2と仮説3は見捨てられ不安においてのみ支持され、仮説4については、ポジティブライフイベントが多いと、親密性の回避を低く保ち続けるということが示唆された。

第4章では、第3章で得られた結果を基に、面接調査によって個人の体験に同じような傾向が見られるかを検討した。その結果、仮説2、仮説3、そして仮説4を裏付けるように、ネガティブライフイベントや信頼できる人物の存在の登場などのポジティブライフイベン

トによって、IWM が変化することが示唆された。また、ネガティブライフイベントが起こると防衛を用い、その不安を低減させようとする働きが見られており、第 3 章で得られた防衛は不安を低減させようとする働きがあるという結果が支持された。

本研究では、防衛及びライフイベントが IWM の変化にどのような影響を与えているのかについてある程度明らかにすることができたと考えられる。臨床的な事例において古くから対人関係に対する不安と防衛との関連は示唆されていたが、今回の調査ではそのことについて数量的に捉えることによって、一般的な傾向として表すことができたと思われる。また、面接調査から、IWM の変化に関する詳細なエピソードや IWM の変化に対する防衛の使い方についても検討できたと思われる。

第2節 今後の展望

本研究においては、縦断調査を用い、一ヵ月という短期間の IWM の変化を捉えた。一ヵ月という短期間においても、かなり IWM は変化していた者はいたが、面接調査にてその変化について聞いてみると、本人自身はあまりその変化を意識していなかったように思われる。このことから、短期的な変化は本人の意識下では行われにくいということが考えられる。過去の IWM の変化について尋ねると、IWM の変化をどのように認知するのかについては、時間の経過によって、後に意味づけが変化することも伺え、長期的な変化には、IWM の変化をどのように捉えるのかという個人の認知が深く関わってくるものであると思われる。その点で、今回捉えた短期的な IWM の変化が、長期的な IWM の変化にどう関わっていくのかについても今後検討がされていくことが望ましいと考える。

面接調査においては、対話型ライフラインの方式を用い IWM の変化の変遷を捉えることを試みたが、対話型ライフラインの方式を用いたことで、面接参加者には IWM 変化の軌跡の確認や、新たな気づきや意味づけがなされるという効果があった。この手法は、今後 IWM の統合や再編を行う上でも役に立つと思われ、新たな介入の 1 つの方法として発展していくことが期待できる。

文献

- 相沢直樹 (2010). 意図の不明確な対人挑発場面と対人疎外場面の作成に関する予備的研究 神戸大学大学院人間発達環境学研究科, **4**(2), 107-122.
- 明石綾香・豊嶋秋彦 (2009). 対話型ライフラインがもたらすもの—分類枠組み作成の試み— 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, **6**, 1-11.
- 明石綾香・豊嶋秋彦 (2010). 対話型ライフライン効果の検証と再探索 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, **7**, 1-8.
- 安藤智子・遠藤利彦 (2005). 青年期・成人期におけるアタッチメントの測定法 (1) アダルト・アタッチメント・インタビュー (Adult Attachment Interview : AAI) 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 pp.144-148.
- 安藤智子・遠藤利彦 (2005). 青年期・成人期におけるアタッチメントの測定法 (2) 質問紙法 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 pp.149-151.
- Andrews, G., Singh, M., & Bond, M. (1993). The defense style questionnaire. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **181**(4), 246-256.
- 青柳肇・酒井厚 (1997). アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係 早稲田大学人間科学研究, **10**(1), 7-16.
- Balint, M. (1968). *THE BASIC FAULT: Therapeutic Aspects of Regression*, Northwestern University Press
- 中井久夫 (訳) (1978). 治療論からみた退行—基底欠損の精神分析— 金剛出版
- Bartholow, K., & Horowitz, L.M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss : Vol.1.Attachment*, New York : Basis Books.
- 黒田実朗・大羽葵・岡田洋子(訳) (1976). 母子関係の理論 I : 愛着行動 岩崎学術出版社
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss : Vol.2.Separation: Anxiety and anger*, New York : Basis Books.
- 黒田実朗・岡田洋子・吉田恒子(訳) (1977). 母子関係の理論 II : 分離不安 岩崎学術出版社
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss : Vol.3.Loss*. New York : Basis Books.
- 黒田実朗・吉田恒子・横浜恵三子(訳) (1981). 母子関係の理論 III : 愛情喪失 岩崎学術出版社
- Hamilton, C. E. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, **71**(3), 690-694.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of personality and social Psychology*, **52**, 511-524.

- 堀匡・小林丈真 (2010). 大学生の愛着スタイルとソーシャルスキルおよび心理・社会的適応との関連 学校のメンタルヘルス, **13**(1), 41-48.
- 泉谷京 (2012). ネガティブな自己開示における被開示者の感情・行動及び開示者との関係 弘前大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊) .
- 金政祐司 (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響—成人の愛着的視点から— 心理学研究, **76**(4),359-367.
- 金政祐司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, **22**(3), 274-284.
- 加藤諦三 (1985). 「思いやり」の心理 大和出版
- 川本哲也 (2013). 青年のパーソナリティとライフイベントの関連 選択効果と社会化効果に注目して 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, **23**.
- 河村茂雄 (2000). 心のライフライン—気づかなかった自分を発見する 誠信書房
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, **48**(3), 323-332.
- Kobak, R. P. & Sccery, A. (1988). Attachment in Late Adolescence: Working Models, Affect Regulation and Representation of self and others. *Child Development*, **59**, 135-146.
- 工藤晋平 (2006). おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧—P-F スタディを用いた検討 パーソナリティ研究, **14**(2), 161-170.
- 久木山健一 (2000). 大学生の仲間入り場面における社会的情報処理の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, **47**, 223-234.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the society for Research in Child Development*, **50**, 66-104.
- 中西公一郎 (1998). The defense style questionnaire—日本での防衛機制研究のために— 社会学研究科紀要, **47**, 27-33.
- 中尾達馬 (2012). 成人のアタッチメント 愛着スタイルと行動パターン ナカニシヤ出版
- 中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか?—4 カテゴリー (強制選択式、他項目式) と 3 カテゴリー (他項目式) との対応性— 九州大学心理学研究, **4**, 55-65.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 岡林秀樹 (2006). 発達研究における問題点と縦断データの解析方法 パーソナリティ研究, **15**(1), 76-86.
- 岡田博名・桂田恵美子 (2013). なぜ人は攻撃するのか: 攻撃性と愛着スタイル及び防衛機制との関連 関西学院大学心理科学研究科, **39**, 37-42.

- 岡島泰三 (2010). 青年期におけるアタッチメントスタイルの変化と恋人の応答性 青年心理学研究, **22**, 33-44.
- 大井京子 (2004). 内的作業モデルと不安・抑うつとの関連 東京家政大学臨床相談センタ紀要, **4**, 17-29.
- 蓮花のぞみ (2008). 青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルの関連性 生老病死の行動科学, **13**, 3-13.
- Roberts, B. W. & Wood, D. (2006). Personality Development in the Context of the Neo-Socioanalytic Model of Personality. In Mroczek, D. K. & Little, T. D. (Eds.), *Handbook of personality development*(pp.11-39). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2002). Attachment-related psychodynamics. *Attachment and Human Development*, **4**, 133-161.
- 嶋田美由紀・田中雄三 (2005). 青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響 鳴門生徒指導研究, **15**, 16-29.
- Spielberger, C. D. (1966). Theory and Research on Anxiety. In Spielberger(Ed), *Anxiety and Behavior*, ch.1. pp.1-20, Academic press.
- 多川則子 (2003). 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究—対人関係観に注目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **50**, 251-267.
- 高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, **14**, 12-24.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 田中裕子 (2006). 母親のアレキシサイミア傾向と愛着との関連—回想された親への愛着, 妊娠初期の胎児愛着に注目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, **53**, 235-236.
- 戸田弘二 (1989). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル —作業仮説 (working models)からの検討— 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, **27**.
- 津山雄亮・中村延江 (2011). アレキシサイミアの感情制御—防衛機制とその影響因としての親の養育態度・愛着からの検討— 心身医学, **51** (6) , 578.
- 上條真美・岡島泰三・桂田恵美子 (2013). 青年期の愛着スタイルと情動生起の関連性について 関西学院大学心理科学研究, **39**, 31-36.
- Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J. & Albersheim, L. (2000). Attachment Security in Infancy and Early Adulthood: A Twenty-Year Longitudinal Study. *child Development*, **71**(3), 684-689.
- Weinfield, N.S., Sroufe, L.A. & Egeland, B. (2000). Attachment from infancy to early adulthood in a high risk sample : Continuity, discontinuity, and their correlates. *Child*

Development, 71(3) 695-702.

山岸明子 (1997). 青年後期から成人期初期の内的作業モデル：縦断的研究 発達心理学研究, 8(3), 206-217.

山崎勝之・内田香奈子 (2005). 調査研究における質問紙の作成過程と適用上の諸問題 鳴門教育大学研究紀要, 教育科学編, 20, 1-10.

●各々の記述があなたに当てはまる程度を判断し、1～9のいずれかの番号を○で囲んでください。

		当 て は ま ら な い										当 て は 全 く
1	私は他人を助けることで満足を得る。もし、助ける機会を取り上げられたら、気分が沈むだろう。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
2	問題を処理する時間ができる時まで、その問題を考えないようにしておく。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
3	不安を抑えるために何か建設的かつ創造的なことをする(例えば描画や工作)。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
4	やる事には何でも、正当な理由を見つけることができる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
5	時々今日すべきことを明日までに引き伸ばす。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
6	自分の失敗を笑いに変えることが容易にできる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
7	人に利用されることが多い。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
8	もし誰かが私を襲ってお金を盗んだとしても、罰せられるより犯人がそのお金で助かることを望む。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
9	不愉快な事実を、それがまるで存在しないかのように無視する傾向がある、と人から言われる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
10	自分がまるで不死身であるかのように危険を無視する。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
11	うぬぼれている人の鼻をへし折る能力は私の誇りだ。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
12	何かに悩まされている時には、しばしば衝動的に行動する。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
13	物事がうまくいかない時には体の具合が悪くなる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
14	とても内気な人間だ。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
15	私がいつでも本当のことを言うとは限らない。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
16	実生活でよりも空想で満足を得る事が多い。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
17	問題なく人生をやり過ごせるような特別な才能をもっている。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
18	物事がうまくいかない時にはもっともな理由がある。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
19	現実の生活においてよりも空想において物事をやり遂げる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
20	私は何も恐れない。	1	2	3	4	5	6	7	8	9		

		当 ては まら ない									私 に 全 然								私 に 全 く 当 て は ま る
21	ある時には自分が天使であると思、ある時には悪魔であると思 う。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
22	傷つけられると、あからさまに攻撃的になる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
23	知っている誰かが自分の守り神のようだいつも感じている。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
24	私の知っているかぎりでは、人は善か悪かのいずれかである。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
25	もし上司が私をいらいらさせたら、仕事でわざとミスしたり、ゆつくり ゆったりして仕返す。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
26	何でもすることができて、絶対的に公平かつ公正である人が知人 にいる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
27	自分の活動の妨げになるような感情を私は抑え続けることができ る。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
28	苦しい状況でも、そのおもしろい側面を見つけることができる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
29	好きでないことをしなければならぬ時には頭が痛くなる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
30	当然怒りを感じるべき人に対して、自分がとても親切であることにし ばしば気がつく。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
31	人生において自分が不当な扱いを受けていると確信している。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
32	困難な状況に出会うことが分かった時には、その内容を予測し対 策を立てる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
33	医者私のどこが悪いのか、けっして本当にはわからない。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
34	自分の権利のために戦った後で、その主張について謝る傾向があ る。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
35	落ち込んでいたり不安な時には、食べることで気分が良くなる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
36	しばしば自分の感情を見せないと人から言われる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
37	悲しい出来事が事前に予測できたなら、それにもっとうまく対応す ることができる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
38	たとえどれだけ不平を言っても、けっして満足のいくような回答を得 られない。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
39	激しい感情を引き起こすような状況においても、何も感じないことが しばしばある。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
40	手近な仕事に集中することで、気分が沈んだり不安になったりする ことを避けられる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
41	もし危機にあつたら、同じ問題を抱えている人を捜し出すだろう。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									
42	もし攻撃的な考えをもつたら、それを打ち消すために何かをする必 要性を感じる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9									

- 前回の調査からの、この1ヵ月の間に以下の出来事を経験しましたか。経験した場合は「経験した」を、経験していない場合は「経験しない」を○で囲んでください。

1	家族、親しい親戚、友人、恋人などが死亡した。	経験した	経験しない
2	人から無視された。	経験した	経験しない
3	信頼していた人に裏切られた。	経験した	経験しない
4	友人、恋人との関係がダメになった。	経験した	経験しない
5	陰で悪口をいわれた。	経験した	経験しない
6	家族、友人、恋人などを傷つけてしまった。	経験した	経験しない
7	友人や仲間から批判されたり、からかわれたりした。	経験した	経験しない
8	人から誤解された。	経験した	経験しない
9	家族との折り合いが悪い。	経験した	経験しない
10	家族、または親しい親戚の誰かが、病気やケガをした。	経験した	経験しない
11	約束を破られた。	経験した	経験しない
12	親しい友人、または恋人が、病気やケガをした。	経験した	経験しない
13	家族、友人、恋人などと、けんか、口論をした。	経験した	経験しない
14	いやな人から交際をせまられた。	経験した	経験しない
15	家族、友人、恋人などの悪口を言われた。	経験した	経験しない
16	仲間の話題についていけなかった。	経験した	経験しない
17	一緒に楽しめる友人が減った。	経験した	経験しない
18	仲間との旅行、遊びの計画が潰れた。	経験した	経験しない
19	家族、友人、恋人などに、自分の欠点を指摘された(または、注意された)。	経験した	経験しない
20	友人、恋人などが、遠くへ引っ越した。	経験した	経験しない
21	家族、親戚内でのトラブルを耳にした(あるいは、それに巻き込まれた)。	経験した	経験しない
22	会話に困った。	経験した	経験しない
23	1人暮らしで、他人との接触が少ない。	経験した	経験しない
24	気の合わない人(嫌いな人)と話をした。	経験した	経験しない
25	友人の悩みやトラブルに関わりを持った。	経験した	経験しない

26	人から信頼された。	経験した	経験しない
27	恋人ができた。	経験した	経験しない
28	家族、友人、恋人などと仲直りした。	経験した	経験しない
29	一緒に楽しめる友人が増えた。	経験した	経験しない
30	気の合う仲間と旅行、遊びに行った。	経験した	経験しない
31	好みの異性に関心をもたれた(または、話をした)。	経験した	経験しない
32	恋人が優しくしてくれた。	経験した	経験しない
33	思いがけなくプレゼントをもらった。	経験した	経験しない
34	人にあげたプレゼントが喜ばれた。	経験した	経験しない
35	人から理解された。	経験した	経験しない
36	恋人とデートをした。	経験した	経験しない
37	恋人との間にあった問題が片付いた。	経験した	経験しない
38	家族と楽しくすごす時間が増えた。	経験した	経験しない
39	家族内のごたごたが解決した。	経験した	経験しない
40	家族、友人、恋人、先生などに助けもらった。	経験した	経験しない
41	仲間とおしゃべりを楽しんだ。	経験した	経験しない
42	家族、友人、恋人から電話があった。	経験した	経験しない
43	なつかしい人から連絡(手紙、電話など)をもらった。	経験した	経験しない
44	旧友と偶然再会した。	経験した	経験しない

- 以下には、いろいろな人が対人関係の中でどのような気持ちを持つかについての文があげてあります。それぞれの文は、「あなたが普通の対人関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」にどのくらいよく当てはまりますか。現在の対人関係の経験だけでなく、いろいろな対人関係の中であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、それぞれの文について下の7件法尺度を用いて評定してください。回答は、文の右にある評定尺度上のもっとも当てはまる番号に○印をつけてください。下線は真ん中です。

		全 く 当 て は ま ら な い								非 常 に よ く あ て は ま る
1	心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかという好きではない。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
2	私は、見捨てられるのではないかと心配だ。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
3	私は、人と親密になることがとてもこちよい。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
4	私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
5	私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
6	私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
7	私は人に心を開くのに抵抗を感じる。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
8	私はいつも、人が私に対していてくれる気持ちが、私が人に対していてほしい気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
9	私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
10	私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
11	私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
12	私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
13	私は人とあまり親密にならないようにしている。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
14	私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要だ。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		
15	私は比較的容易に人と親密になれると思う。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7		

		全 く 当 て は ま ら な い							非 常 に よ く あ て は ま る
16	私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じる 때가ときどきある。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
17	私は、自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
18	私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
19	私は人とあまり親密になることがどちらかというと好きではない。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
20	私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら、私はきっと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
21	私は、人に何でも話す。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
22	私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
23	私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
24	私は誰かと付き合いがないと、何となく不安で不安定な気持ちになる。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
25	私は人に頼ることに抵抗がない。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
26	私は、私がいってほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
27	私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
28	私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
29	人にダメだなあとと言われると、自分は本当にダメだなあと感じる。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	
30	私は、知り合いが私のことをほっといて自分一人で何かをすることが重なってくると腹が立っててしまう。	1	2	3	<u>4</u>	5	6	7	

今回の調査は、2回に分けて調査を行うものです。

匿名性を保ちつつ、1回目と2回目の調査用紙の対応を知るために、誕生日、名前のイニシャル、名字のイニシャルを下の□の中記入してください。

例) 4月1日生まれ、ヤマダタロウ

0	4	0	1	T	Y
---	---	---	---	---	---

--	--	--	--	--	--

面接調査承諾書

教育学研究科 長内紗希
指導教員 弘前大学教育学部 平岡恭一

以下の確認事項をお読みください。

- (1) お話しいただいたことは、研究目的のみに使用します。
- (2) お話しいただいたことは、プライバシーが保護される形で使用します。
- (3) 研究にあたり、指導教員と内容を共有することがあります。その際にも、お話しいただいたことは、プライバシーが保護される形で使用します。
- (4) この研究は、論文としてや研究発表などで公表されます。その際にも、お話しいただいたことは、プライバシーが保護される形で使用します。録音したものを一度文章に書き起こした上で、個人が特定される情報を削除したり、変更したりして、プライバシーが保護される形式の文章をあらためて作成し、その文章のみを研究発表等で用います。

上記について、ご承諾いただけましたら、以下の所定欄にご署名ください。

私は、本研究に対し、調査協力者として、上記の条件のもとで面接調査を受けることを承諾します。

調査協力者署名： _____ 日付 _____ 年 _____ 月 _____ 日